
心の在処

Jemko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の在処

【Nコード】

N1780BA

【作者名】

Jemko

【あらすじ】

ひよんな事から主人公が抜いた剣の中から、12の悪しき心が解き放たれてしまい、それを再び封印する為に親友の騎士と旅に出る。

マモノ（前書き）

物語りはバーレンシュタインという小さな町から始まる。

この町にはシュタイン城という城があり、若き王子がいた。

彼は外交や市民の声を聞いたり、忙しくも充実した時間を過ごす日々。

そんな中、今朝も早くから国王デイランに呼び出しを受けて王の間に来ていた。

マモノ

―シュタイン城 王の間―

レオン「父上、ただいま参りました」

彼の名は【レオンハルト】この物語の主人公であり王子である。

年齢は18歳、身長181cm。金髪に青い瞳を持ち。美形で細身。服装はマントに貴族っぽい服という、いかにも王子といった感じだ。

国王「レオンよ、お前を呼んだのは他でもない、封印の洞窟へ向かってもらう為だ」

レオン「それは構いません・・・が、理由を教えてくださいか？」

国王「うむ、よからう。実はな、封印の洞窟には【マモノ】が封印されておる」

レオン「マモノとは？」

国王「マモノとは、人々の心に巢食う悪しき心。シュタイン家のモノは、代々マモノの封印を守る役目を担っている」

レオン「そんな役目があったのですか」

国王「うむ。お前に封印の洞窟へ向かってもらうのは、マモノの事で気になる事があるからだ」

レオン「気になる事ですか？」

国王「うむ。マモノが封印されてから今年で100年。そろそろ封印が解ける頃なのだ」

レオン「なんと・・・。それではこんな悠長に話をしてる場合ではありません。早速向かいます」

国王「そう焦らなくてもよい」

レオン「しかし！」

国王「話は最後まで聞きなさい」

レオン「申し訳ありません・・・」

国王「封印の洞窟に入るには、この【心の鍵】が必要だ」

そう言ってレオンに鍵を手渡す。

レオン「確かに、お預かりしました」

国王「それとな、洞窟には心の剣というモノが安置されておるのだが。もしも、剣が光を放っていたのなら抜いてくるのだ」

レオン「わかりました」

国王「うむ。それでは任せたぞ」

心の鍵を受け取ったレオンは王の間を後にして、封印の洞窟へ向かう準備をする。

―シュタイン城 レオンの部屋―

レオン「一応、これも持っていた方がいいかな」

荷物を整理していると、”コンコン”と誰かがドアがノックする音が響く。

レオン「開いてるよ」

”ガチャ” ”ギィー”と音を立てながらドアが開いていくと、一人の青年が入ってくる。

青年は銀髪に緑の瞳。身長は194cm。体格はガツシリとして、背中に槍を背負い、左手に大きな盾を持ち、銀色の鎧に身を包んだ

騎士風の格好をしていた。

騎士風の青年「よお、レオン。封印の洞窟に行くんだってな？」
レオン「ジークか。もう聞付けたのか？」

どうやら騎士風の青年の名はジークと言うらしい。

ジーク「俺の情報網をナメるなよ？」

レオン「お前は警備より、諜報活動が向いてるんじゃないか？」

ジーク「冗談言ってないで、質問に答えろよ」

レオン「これから行く所だ」

ジーク「やっぱりな。お前が俺に何も言わない時は、決まって面白
そうな事をする時だ」

レオン「遊びに行くわけじゃないんだぞ？」

ジーク「それくらいわかってるさ。俺は王子の警護で仕方なくつい
て行くだけだ」

レオン「はぁ・・・、わかったよ。お前は一度言い出したら聞かな
いからな」

ジーク「ハハハ、さすがは親友だな」

レオン「荷物はこんなもんでいいか」

ジーク「オーライ、行こうぜ」

荷物の整理が済んだレオンは、ジークと共に封印の洞窟を目指す。

―封印の洞窟―

洞窟に辿り着くと扉の前で兵士が見張りをしていた。

兵士「これはレオン様、如何なされましたか？」

レオン「父上の命により、封印の状態を調べにきた」

兵士「了解しました。それはそうと、なぜジークが一緒に？」

レオン「ジークには、俺の警護で来てもらっている」

ジーク「フッフ、そういう事なのだよ」

兵士「・・・。まあいいでしょう、お通り下さい」

洞窟の扉の前に立つと、鍵穴に心の鍵を差し込む。

すると、しばらく使われていなかったせいか、重く鈍い音を立てて扉が開いていく。

ジーク「ヒュー」

レオン「入るぞ」

洞窟の中へ入っていく二人。

松明で辺りを照らしながら慎重に通路を進むと、開けた場所に辿り着く。

―封印の洞窟 封印の間―

レオン「ここが封印の間か」

ジーク「なんもねえな」

レオン「そりゃ、宝物庫じゃないからな」

ジーク「おい、剣が刺さってるぜ」

封印の間には階段があり、その先には台座があつて、そこには一本の剣が刺さっていた。

レオン「父上が言っていた心の剣とはあれの事か」
ジーク「近づいてみようぜ」

2人は階段を上り台座へと近づいていく。

ジーク「それで、何しにきたんだ？」

レオン「剣が光を放っていれば抜け、との事だ」

階段を上り終えた二人の目に映ったのは、目映ゆい光を放っている
剣の姿だった。

ジーク「ギンギンに光ってるぞ」

レオン「これは・・・、抜くしかないな」

ジーク「なあなあ」

不適な笑みを浮かべながらレオンに話しかけるジーク。

レオン「ダメだぞ」

ジーク「まだなんも言っていないだろ！」

レオン「お前が抜くって言うんだろ？」

ジーク「ツチ、バレたか」

レオン「どうしても、って言うなら抜かせてやらん事もないが」

ジーク「マジかよー！？俺にやらせてくれよ」

レオン「フハハハ、いいぞ」

ジーク「やったぜ」

ジークはニヤニヤしながら台座の前に立つ。

ジーク「いくぞ！」

剣の柄の部分を両手で握ると、全力で引き上げる。

ジーク「ぬをおおおおおおお!!」

全力で引き抜こうとするが、先にジークの腰が抜けてしまう。

ジーク「はぁ・・・はぁ・・・。な、なんでだ・・・」

レオン「差詰め、王家のモノにしか抜けないとかそんな事だろう」

ジーク「先に言えよ・・・」

レオン「言ったら面白くないだろ？」

ジーク「おまえなー!!」

レオン「フハハハ、そう怒るな」

ジーク「あぁ、疲れて怒る気にもなれん・・・」

レオン「今度は俺がやろう」

そう言うと、今度はレオンが台座の前に立つ。

レオン「何が起こるのか・・・」

剣の柄を握り、引き抜いた途端、剣の中から禍々しい気を放つ黒いモノが溢れ出す。

????「パオオオオン!!ヨクモフウインシテクレタナ!!ユルサ
ンゾオオオオウ!!」

????「ツラカッタ・・・クルシカッタ・・・」

????「マタハタラクノカ・・・メンドクセーナ」

????「ホントチョームカツクマジアリエナインデスケド」

????「セカイヲ、キョウフノドンゾコニ、オトシテヤリマシヨウ」

????「コノセカイオレノモノ、ゼンブオレノモノ」

ジーク「お、おい！なんだよこれ！？」

レオン「マモノが復活したのか！？」

二人は剣の中から次々と溢れ出すマモノをただ見ている事しかできなかった。

「スベテハマボロシ・・・、イツワリノヘイワ・・・」

「ハラヘッタナー！ハラヘッタナー！！」

「グスグス・・・、ナンデアタシガコンナメニ・・・」

「ウフフフフ、オトコヲアサリニイカナイト」

「オギャー！オギャー！」

「オロカナニンゲンヨ、フウィンヲトイタコトヲホメテヤルゾ」

解き放たれたマモノ達は洞窟の外に向かって消えていく。

レオン「この事を父上に報告しなければ」

ジーク「よっしゃ帰ろうぜ」

レオン「この剣は持っていくか」

マモノが復活した事実を伝える為、シュタイン城に戻るのであった。

―シュタイン城 王の間―

レオン「父上、ただいま戻りました」

国王「うむ。どうであったか？」

レオン「剣が光を放っていたので引き抜いたところ、マモノと思われるモノが復活してしまいました」

国王「そうか……。わかった下がっていいぞ」

レオン「それだけですか？」

国王「何が言いたい？」

レオン「復活したマモノはどうなさるのですか!？」

国王「我らの手に負えるものではない」

レオン「それでは、放っておけと？」

国王「うむ。それしかあるまい」

レオン「わかりました……。失礼します」

レオンは部屋を出て行き自分の部屋へと向かう。

それからしばらくすると、国王が大声で衛兵を呼び始める。

国王「衛兵! 衛兵はおらぬか！」

兵士「お呼びでしようか？」

国王「レオンを捕らえよ」

兵士「は？」

国王「聞こえなかったか？ レオンを捕らえよ」

兵士「いくら国王様の命令とはいえ、理由も無しに王子を捕らえる訳には……」

国王「理由ならある。奴は王家の宝である心の鍵を勝手に持ち出した」

国王「それだけならまだしも、あろう事かマモノの封印を解いてしまったのだ」

兵士「封印を解いてしまったのですか!？」

国王「うむ。いくら王子とはいえ、許されるものではない」

兵士「わかりました。すぐに兵士を集めます」

兵士は部屋を飛び出し、仲間の兵士を集めに行く。

―シュタイン城　レオンの部屋―

その頃、レオンはマモノについて部屋で考えていた。

レオン「父上は何を考えておられるのだ・・・」

レオン「王家のモノの務めを放棄なされるおつもりなのか・・・」

そんな事を考え込んでいると、”ギィー”　”ガチャン”と勢いよくドアが開かれた。

ジーク「おい！こんな所でボーッとしてる場合じゃないぜ」

レオン「どうした？」

ジーク「どうしたじゃねえよ。衛兵がお前を捕まえる為に集結してるぞ」

レオン「衛兵が？どういう事だ？」

ジーク「そんな事知るか。とにかくここにいたら捕まるぞ」

レオン「父上に理由を聞いてくる」

ジーク「お、おい！まてよ！」

国王から話を聞くため部屋を飛び出していくレオン。

ジークはその後を慌てて追いかける。

―シュタイン城　王の間―

レオン「父上！」

ジーク「レオン待ってって！」

国王「来たな反逆者共め」

ジーク「共、って俺もかよ」

レオン「父上、何をおっしゃっているのですか？」

国王「マモノの封印を解いた罪は重い、死をもって償うのだ」

国王と話していると、準備を終えた衛兵達がやってくる。

ジーク「逃げ道を塞がれちゃったな」

レオン「父上！どういう事なのですか！」

国王「貴様に話す事などない」

レオン「なっ！」

衛兵「王子……。信じたくはありませんが、これも命令です。大人しく捕まってください」

レオン「……」

ジーク「レオン、行けるか？」

レオン「ああ、問題ない」

国王「お前たち、何をする気だ？」

ジーク「こうするのさ！」

ジークは盾を構えて窓に向かって走ると”ガシャーン”という音を立てて外に飛び出す。

その後に続くようにしてレオンも飛び込む。

国王「おのれ……。衛兵！早く追いかけるのだ！」

衛兵「ハッ！」

―シュタイン城 中庭―

ジーク「いててて」

レオン「ジーク、大丈夫か？」

ジーク「ノープロブレムだ」

レオン「お前まで巻き込んでしまつてすまないな」

ジーク「何言つてんだよ、困つた時こそ親友を頼れよ」

レオン「フハハハ！そうだな」

衛兵「あっちにいたぞー！」

ジーク「おつと見つかったか。早いところ逃げようぜ」

レオン「ああ、そうしよう」

出口を目指して全力で逃げる二人。

ジーク「んでよ、どこに逃げるよ？」

レオン「あまり気は乗らないが、リリイに助けを求める」

ジーク「ハハハ！リリイか、そりゃいい」

レオン「はぁ……。俺にとっては笑い事じゃない……」

なにか訳がありそうなレオンであつたが、こんな状況では贅沢を言つていられず、

嫌々ながらもリリイに助けを求めるのであつた。

第一話 完

マモノ（後書き）

虹の彼方での経験を踏まえて書いていこうと思います。キャラの喋りが多いのは仕様ですのでご了承下さい。※1／13 少し文章をイジったので見易くなった・・・、と思います※

クインシーの姫（前書き）

衛兵に追われる身となった二人は、リリィに助けを求めべく街道を走っていた。

クインシーンの姫

―街道―

ジーク「はあはあ・・・ここまで来れば平気だろ」
レオン「そうも言ってられないようだ」

衛兵「むわああああてええええい!!」

休憩する暇も無く、衛兵が追いかけてくる。

ジーク「ぬわあああ!!もうしつけーよ!!」
レオン「もうすぐクインシーンが見えてくるはずだ」

衛兵から全力で逃げる二人。

ジーク「ゼーハーゼーハー」
レオン「王子の警護ともあろうものがだらしないぞ」
ジーク「よ、鎧が重いんだよ!」
レオン「脱げよ」
ジーク「この鎧は騎士の魂なんだよ!」
レオン「そんな事知るか」
ジーク「おまえなー!薄情だなー!」
レオン「ジーク、見えてきたぞ」
ジーク「おっ? やつとか」

ようやくクインシーンの門前に到着すると、見張りの兵士に呼び止められる。

兵士「その二人、止まりなさい」

レオン「私はレオンハルトⅡシュタインだ。ここを通してもらえないか？」

兵士「これはレオン様！失礼致しました、どうぞお通りください」

レオン「すまないな。ついでに一つ頼みがある」

兵士「なんでしょうか？」

レオン「これからシュタイン城の兵士の格好をした奴らが来ると思うが」

レオン「奴らはただの盗賊だ、絶対に通してはならない」

兵士「ハッ！承知しました」

兵士にそう頼むと、二人は町に入っていく。

―クインシーン―

ジーク「はあ、やっと一息つける」

レオン「心の準備もあるし、城に行く前に少し休むか」

ジーク「へへへ、そうこなくっちゃな。あそこに飯屋があるぜ」

レオン「別に腹は減ってないが」

ジーク「いいからいいから」

ジークに連れられ、近くの店に入っていく。

店員「いらっしやーせー」

ジーク「二人ね」

店員「あーい、二名様ごあんなーい」

テンションの高い店員に案内され、席に座る二人。

店員「注文が決まったら呼んでね」

ジーク「どれにしようかな」

レオン「俺は決まった」

ジーク「はえーなおい」

レオン「お前はテリヤキセットで良いだろ」

ジーク「嫌だ、絶対嫌だ」

レオン「わがままだな」

それから数分後。

レオン「そろそろ決めろ」

ジーク「うーん」

レオン「もう店員呼ぶぞ」

ジーク「おいバカ！まだ決まってねえよ」

テーブルに置いてあったベルを鳴らすと”リンリン”と音を出し、
店員を呼び寄せた。

店員「決まった？」

レオン「ざるそば二人前」

店員「はい、すぐもってくるね」

店員は厨房に注文を伝えるに行く。

ジーク「二人前ってもしかして・・・」

レオン「お前が遅いのが悪い」

ジーク「ぐぬぬ」

3分も経たない内に料理が運ばれてくる。

店員「おまた〜」

ジーク「はえーな！」

店員「ざるそば二人前です」

レオン「ご苦労」

店員「ごゆっくりどうぞ」

料理をテーブルに並べ終わると、店員はその場を去っていく。

二人「ずるるるるるるるるるる！」

レオン「うまいな」

ジーク「うん、うまいな」

二人は黙々とそばを食べ進め、辺りにはそばをすすする音だけが響き渡る。

そんな状態がしばらく続くと、唐突にジークが口を開く。

ジーク「ひひいにあうのあひはひふりははあ」

レオン「飲み込んでから喋れ」

ジーク「ゴクン」

ジーク「リリィに会うのは久しぶりだなあ」

レオン「あまり会いたくはないがな」

ジーク「お前も罪な奴だよなー」

レオン「なにがだ？」

ジーク「リリィは曲り形にも姫だぜ？外見もかわいいっちゃかわいいし」

レオン「姫だとか外見だとか、そんなものに価値は無い」

ジーク「ならよ、何に価値があるんだ？」

レオン「心だ」

ジーク「ブーーーーッ!!」

レオンの率直なセリフに思わずソバを吹き出す。

レオン「汚いな」

ジーク「ハハハハハハ!!」

レオン「なにがおかしい?」

ジーク「よくもそんな恥ずかしいセリフが言えたもんだな」

レオン「思った事を言っただけだ」

ジーク「それが恥ずかしいって言ってるんだよ」

レオン「そういうモノか・・・」

ジーク「まっ、気持ちはわかるけどな」

そんな話をしながら食事を終わると、ある事に気づく。

ジーク「ふう、食った食った」

レオン「ところでジーク、金は持っているのか?」

ジーク「いんや、いきなり城飛び出してきちゃったからな、サイフ持ってきてないぞ」

レオン「フハハハ! 気が合うな俺もだ」

ジーク「ハハハハ、はぁ!」

レオン「どうするかな」

ジーク「兵士から逃げ切ったのに、食い逃げして捕まるとかシャレにならんぞ」

レオン「ジーク・・・、ここはお前の鎧を担保にしてくれ」

ジーク「ダメだダメだダメだ!」

レオン「役に立たん奴だな」

ジーク「ぐぬぬ」

レオン「仕方ない、俺が交渉してくる」

レオンは店員に交渉しに向かう。

レオン「君、すこし話があるんだが」

店員「なに？」

レオン「実はな・・・、ごによごによ」

店員「ああ、そういうことね。いいよ、立て替えといてあげる」

レオン「すまないな」

無事に交渉を成立させて、ジークのもとへ戻る。

ジーク「よお、どうだった？」

レオン「問題ない」

ジーク「さすがだな。なんて言ったんだ？」

レオン「ジークの鎧を担保にするから金を立て替えてくれ、ってな」

ジーク「・・・」

レオン「なにやってる、いくぞ」

ジーク「ばかやろー!!」

レオン「元はと言えば、お前が店に誘ったのが原因だぞ？」

ジーク「それとこれとは話が別だろ」

レオン「お前も騎士なら潔く諦めろ」

ジーク「ぐぬぬ」

ジークは泣く泣く鎧を脱いで店員に預けると、二人は店の外に出る。

ジーク「はぁ・・・」

レオン「落ち込んでる暇はないぞ、早く金を作って取り戻さないと
な」

ジーク「そうだな・・・、そうだよな!」

一瞬で立ち直ったジークと共にクインシー城に向かうと、城の前

にいた兵士が二人を呼び止める。

兵士「その二人、止まりなさい」

レオン「私はレオンハルトⅡシユタインだ。ロバート王にお会いしたい」

兵士「これはレオン様！失礼致しました」

兵士「しかし、いくらレオン様でも、予定の無いモノをいきなり会わせる訳には・・・」

レオン「確かにその通りだな。それならリリイを呼んで貰えないか？」

兵士「それくらいなら構いませんが」

レオン「頼む」

兵士「では、少々お待ちください」

兵士は城の中へリリイを呼びに行き、しばらくすると派手なドレスを着た少女を連れて戻ってくる。

リリイ「レオン！」

金髪に青瞳を持ち。身長は155cm。体は細身で、髪は腰の辺りまで伸びている。

服装はというと、純白のドレスを身に纏い、手には何故かムチが握り締められていた。

ジーク「うひゃー、でたー」

リリイ「もう！レオンったら全然会いに来てくれないんですもの」

レオン「それはすまなかった」

ジーク「よお、久しぶり」

リリイ「なんだ、ジークもいらしたの」

ジーク「ひでえー」

リリィ「それでえー、わたくしに会いに来てくれたの？」

レオン「いや、ロバート王に」

リリィ「お父様に？まあいいですわ。参りましょう」

ジーク「ヒソヒソ・・・（ちょっとは女らしくなったんじゃないかな？）」

レオン「ヒソヒソ・・・（それはどうかな）」

リリィ「二人共なにやってますの！早く行きましょう」

兵士「リリィ様！勝手な事をされては困ります」

リリィ「おだまり！」

容赦なく兵士をムチで打つ。

兵士「ヒィィィ！！」

リリィ「わたくしに意見するなど、許されませんことよ！」

兵士「ハハア！申し訳ありません」

兵士は土下座して謝る。

リリィ「さあ参りましょう♪」

レオン「ああ、そうだな」

ジーク「（全然変わってなかった・・・）」

こうしてリリィの力添えにより、国王ロバートに謁見できる事となった。

―クインシーン城 王の間―

リリィ「お父様、レオンがいらっしゃったわよ♪」

ジーク「俺もいるぞー」

ロバート「なあにいゝ？」

レオン「お久しぶりでございます」

ロバート「おおー！二人ともよく来たな！」

レオン「突然の訪問、申し訳ありません」

ロバート「構わん構わん」

レオン「ロバート王にご相談したい事がありまして」

ロバート「うむ、申してみよ」

レオン「実はかくかくしかじかで」

レオンはバーレンシュタインで起きた事の一部始終を話した。

ロバート「ふーむ、話はわかった。マモノが世に解き放たれたとなれば一大事だな」

レオン「そこで、私が王家のモノとして、マモノを封じる旅に出ようと思うのです」

ロバート「良く言った！それでこそ俺の見込んだ男だ！」

レオン「旅をするにあたって、ロバート王にお願いがございます」

ロバート「申してみよ」

レオン「正門には我が城の兵士が待ち伏せていると思われるので、裏門を通らせて頂きたい」

ロバート「そんな事なら容易いぞ」

レオン「それと、町で異変が起きていないか調べて頂きたい」

ロバート「衛兵！」

衛兵「ハッ！」

ロバート「裏門を開けておいてやれ。それから、町に異変が起きていないか調べてくるように」

衛兵「了解しました！」

レオン「ありがとうございます！」

ロバート「うむうむ」

レオン「それでは我々はこれで・・・」

ロバート「まてまて、マモノ退治をするのなら教えておく事がある」

レオン「なんでしょうか？」

ロバート「心の鍵と心の剣についてだ」

レオン「なにかご存知なのですか？」

ロバート「うむ、心の鍵は元々は我が城の宝だからな」

レオン「そうでしたか」

ロバート「話というのは他でもない、使い方についてだ」

レオンは真剣な表情で話しに耳を傾ける。

ロバート「まずは鍵についてだが。心の鍵とは、人の精神世界に入る為の道具である」

レオン「精神世界？」

ロバート「うむ、人間誰もが心の中に自分の世界を持っている」

ジーク「おいおい、人の心に入れる道具なんてヤバいんじゃないか？」

ロバート「もっともな意見だな。しかし、いきなり鍵を使っても入れる訳ではない」

ジーク「どういう事だ？」

ロバート「心の扉が出現していなければ、鍵は使用できない」

レオン「心の扉とは？」

ロバート「心の扉とは精神世界と現実世界を繋ぐ門。扉を出現させる方法は二つある」

ジーク「いよっ、待ってました」

ロバート「その1…相手を動揺させる　その2…相手の信頼を得て心を開かせる」

レオン「ふむ……。おい、ジーク」

ジーク「ん？」

レオン「お前、小さい頃にリリイのパンツ盗んだよな」

ジーク「なななな、なにいつてんだよ!!!」

リリイ「ジーク！あなたって人は！」

ジーク「いやいやいやいや、盗んでない！盗んでない！」

ジークがわかりやすい動揺をしたその時、胸の辺りに白い光が表れた。

レオン「（これが心の扉か・・・）」

レオン「ジーク、ご苦労だった。ロバート王の言うとおりの扉は表れた」

ジーク「てめえー！俺を実験に使いやがったなー！」

レオン「フハハハ、すまんすまん」

リリイ「でも、わたくしには見えませんでしたわよ？」

ロバート「うむ、鍵の所有者にしか見えないのだ」

レオン「面白いな」

ジーク「俺をおもちやにするなよ・・・」

レオン「（次は後者の方法を試してみるか）」

レオン「リリイ、俺に心を開いてくれないか？」

リリイ「喜んで♪」

レオン「（白く光っているな・・・）」

レオン「ありがとう。扉は確認できた」

ロバート「心の鍵について私が知っている事はこれくらいだが、まだ秘密があるかもしれん」

レオン「はい、旅の途中で色々調べてみます」

ロバート「次は心の剣についてだが、心の剣とはマモノを封印する

ための道具」

ロバート「マモノを再び封じるには、鍵を使って精神世界に入り、心の剣でマモノにトドメを刺すのだ」

レオン「なるほど」

ロバート「そして、心の剣を扱えるのは王家の血を引く心正しきモノだけである」

ジーク「やっぱ王家の人間だけなんだな」

ロバート「うむ、剣についてはこれくらいしかわからんが、まだ隠された能力はあるだろう」

レオン「心しておきます」

ロバート「以上で私の話は終わりだ。引き止めて悪かったな」
レオン「いえ、ありがとうございます」

リリィ「さてさて、話が終わった所で行きましょうか」

ジーク「ん？なにいつてんだ？」

リリィ「わたくしもお供しますわよ」

レオン「・・・」

ジーク「おいまで、なに勝手に決めてんだよ」

リリィ「あら？なにか文句がおりかしら？」

ジーク「いやいや、ロバート王が許さないだろ」

ロバート「構わん構わん、行ってきなさい」

リリィ「これで決まりね」

ジーク「こんな危険な旅に姫を行かせていいのかよー」

ロバート「一国の王女たるもの、旅の一つや二つしなくてどうするか」

リリィ「お父様はわかってらっしゃいますわね」

ジーク「レオンもなんか言ってやれよ」

レオン「・・・」

ジーク「はぁ・・・、ダメだこりゃ」

マモノ退治の旅に無理矢理ついて来る事になったリリィ。
新たな仲間を加えた一行は、城の外に出る。

―クインシーン―

城の外に出てみると、調査を終えた衛兵が待っていた。

衛兵「ご報告致します。町人に聞き込みをした所、特に異変は確認
できませんでした」

レオン「そうか、ご苦労だった」

衛兵「ハッ！それでは私はこれで」

リリィ「これでこの町に用はなくなりましたわね」

レオン「いや、まだ一つやり残した事があったな」

リリィ「なんですの？」

レオン「そば屋に金を返さないといけないんだ」

リリィ「お金？」

レオン「実はな、そばの代金が払えなかった為に、ジークの鎧を担保にして金を立て替えてもらってるんだ」

リリィ「なーるほど、だからジークが上半身裸なのね」

ジーク「てへっ☆」

レオン「だから、金を貸して貰えないか？」

リリィ「レオンの頼みなら喜んで♪」

リリィを連れてそば屋に向かい、店員に金を渡して無事に鎧を取り
戻した。

ジーク「やつほー、俺の鎧♪」

リリィ「ジーク、わたくしを一生崇め奉りなさい」

ジーク「やだねー、鎧が戻ればお前のムチも怖くないぜ」

リリィ「ムキー！」

レオン「リリィ、怒るとかわいい顔が台無しだぞ」

リリィ「まあ！レオンったら・・・／＼／＼」

ジーク「アホやってないで、次の町に行こうぜ」

レオン「裏門の先は確か海に繋がっていたな」

リリィ「ええ、サンシャインという町があって、そこには観光名所

のサンビーチがありますわ」

ジーク「（水着ギャル・・・。デュフフフ）」

リリィ「ジーク、はしたないわよ」

ジーク「な、なんの事だよ」

リリィ「いやらしい事でも考えていたんでしょう？」

ジーク「フフフ、残念でした」

レオン「扉が表れているぞ」

ジーク「ぐぬぬ！」

こうして、マモノ退治をする事になった一行は、常夏の町サンシャインへ向かうのであった。

第二話 完

クインシーの姫（後書き）

第二話は大まかな設定うんぬんに関する話です。

おっさんとジーク（前書き）

クインシーを出発した三人は、常夏の町サンシャインを目指して街道を歩いていた。

おっさんとジーク

―海沿いの街道―

ジーク「ヒュー、海が見えるぜ」

レオン「潮風が心地良いな」

リリィ「レオン、後で泳ぎにいきましょーよ」

レオン「遊びに来てるわけじゃないんだぞ」

リリィ「もう！少しくらい良いでしょ！」

レオン「ダメだ」

リリィ「むー！」

ジーク「まあまあ、そう堅い事言うなよ。マモノはビーチにいる！俺の勘がそう告げる！」

リリィ「ジークの言うとおりですわ♪」

レオン「ダメだ」

ジーク「ぐぬぬ」

リリィ「町が見えてきましたわよ」

長い事街道を歩き、ようやくサンシャインに到着する。

―サンシャイン―

ジーク「うつひょー、水着ギャル！」

レオン「ここからは情報集めの為に別行動するぞ」

ジーク「オーライ、俺は女の子達に話を聞いてくるぜ！」

猛スピードで海へ向かうジーク。

レオン「集合場所を聞いてから行けよ・・・」

リリイ「わたくしはレオンと一緒に行動しますわ♪」

レオン「そうだな」

レオンとリリイは二人で町を探索する事になった。

リリイ「レオン、あそこのお店になにかありそうですわよ」

レオン「入ってみるか」

リリイに連れられ服屋に入る。

リリイ「レオン、この服どう？」

レオン「かわいいな」

リリイ「それじゃこれは？」

レオン「かわいいよ」

リリイ「じゃあじゃあ、これは？」

レオン「かわいいぞ」

リリイ「キャー、困っちゃう」

レオン「（ジーク、助けてくれ・・・）」

その頃、ジークはビーチでナンパをしていた。

ーサンビーチー

ジーク「そこの君！俺とデートしない？」

ギャル「キャー、変態！」

ジーク「逃げる事ないだろうに」

数分後。

ジーク「そこのお姉さーん、俺とデートしない?」

ギャル「キャー、変態!」

ジーク「うーん、なにが問題なんだろうな」

おっさん「その格好じゃないのかね」

ジーク「言われてみれば、砂浜で鎧着てたらおかしいか」

ジーク「てか、おっさん誰だ?」

おっさん「おれかあ? おれはこのビーチの管理人だ」

ジーク「ふえー」

おっさん「お前こそ誰だ?」

ジーク「おれかあ? おれは騎士だ」

おっさん「こんなご時世に騎士とは珍しいな」

ジーク「そうだろそうだろ、ラストナイトと言っても過言ではないな」

おっさん「そのラストナイトがなんでこんな所にきたんだあ?」

ジーク「そりやもう話せば長くなるんだがな」

おっさん「20文字以内にまとめてくれ」

ジーク「そうだな、マモノを退治しに来た」

おっさん「マモノお?」

ジーク「そうなんだよ、おっさんなんか知らないか?」

おっさん「しらねえなあ」

ジーク「そうだよな、おっさんだもんな」

おっさん「おっさん今、少し傷ついたな」

ジーク「悪い悪い。ところでおっさん、カキ氷奢ってくれよ」

おっさん「なに味がいいんだ?」

ジーク「そりやもうメロン」

おっさん「おっさんもなあ、メロン好きなんだ」

ジーク「だろだろー？」

二人はかき氷を食べようと、ビーチ入り口付近の階段に腰掛けると、
”シャリシャリ”とかき混ぜ”パクリ”と一口食べれば、頭が”キ
ーン”とするお約束を楽しんでいた。

ジーク「この感じが堪らないぜ！」

おっさん「そうだなあ」

ジーク「ところでおっさん。管理人って言ってたけどよ、ただボー
ツとしてるだけなのか？」

おっさん「いやそれがなあ、前は違ったんだけどなあ、最近やる気
が出なくてなあ」

ジーク「ふえ〜」

おっさん「なんなんだろうなあ、歳なのかなあ」

ジーク「おっさん何歳？」

おっさん「58」

ジーク「ヒュー、35くらいに見えるぜ」

おっさん「そうかあ？」

ジーク「ああ、イカしてるぜ」

おっさん「そう言われると、なんだかやる気が出てくるぞお」

こんな世間話をして目的を忘れているジーク。

その頃、レオンとリリイの二人は・・・。

―サンシャイン―

レオン「リリイ、そろそろジークを探しに行こう」

リリイ「えー、もうちょつと買い物しようよ」

レオン「しかし、そろそろ日が暮れてしまうしな」
リリィ「もうそんな時間ですか？」

レオン「ああ、ジークが迷子になったら困るだろう？」

リリィ「そうだったら、二人っきりで旅ができますわね」

レオン「・・・（一筋縄ではないかな・・・）」

リリィ「レオン？どうなさったの？」

レオン「リリィ、海辺の夕焼けを見に行こう」

リリィ「まあ！ロマンチックですわね♪」

レオン「そうだろうそうだろう」

上手くりリィを釣ったレオンは、ジークがいると予想しているビーチに向かった。

―サンビーチ―

ビーチに到着した二人が最初に見たモノは、夕焼けでも海でもなく、階段に腰掛けたおっさんとジークの姿だった。

ジーク「そうか、おっさんも大変だったんだなあ」

おっさん「そうなんだよ、わかってくれるか・・・」

ジーク「ああ、わかるとも。俺も仲間にこき使われてるんだ」

おっさん「そうかそうか、お前も大変だなあ」

レオン「ジーク、なにやってるんだ？」

ジーク「おお、レオン。お前にも紹介するよ、この人はビーチ管理人のおっさん」

おっさん「やあやあ、ラストナイトから話は聞いているよ」

レオン「どうも（このおっさん、胸が光っている・・・。だが、光

の色が黒いぞ・・・?」

レオン「ジーク、ちょっと来てくれ」

ジーク「ん?なんだ?」

少し離れた場所へジークを連れて行く。

レオン「あのおっさん、胸に黒い光が出ているんだ」

ジーク「なに!？」

レオン「もしかしたらマモノが巢食っているのかもしれん」

ジーク「そういや、おっさんが最近やる気がでない、って言ったな」

レオン「当たり前・・・」

ジーク「よし、俺がおっさんに話をつけてくるぜ」

おっさんのもとへ戻る二人。

ジーク「おっさん!」

おっさん「どうしたあ?」

ジーク「俺の探してるマモノってのがさ、おっさんの心の中にいるみたいなんだ」

おっさん「またまたあ、おっさん騙されないよ」

ジーク「いやいや、本当なんだって。おっさん最近調子が悪いんだろ?」

おっさん「まあたしかになあ」

ジーク「マモノってのが心に入ると、そうなっちまうんだよ多分」

おっさん「そうなのかあ」

ジーク「だが安心していいぜ!俺たちがそのマモノをぶちのめしてやる」

おっさん「心の中にいるんだろお?どうやってぶちのめすんだあ?」
ジーク「へっへっへ、おっさんちよっと目を瞑ってみな」

おっさん「こうかあ？」

ジーク「ヒソヒソ・・・（レオン、今だ）」

レオン「ヒソヒソ・・・（でかしたぞ）」

おっさんが目を閉じている間に心の鍵を使う。

すると、辺りが光に包まれ三人を飲み込んでいく。

―精神世界―

レオン「ここが精神世界か」

ジーク「げえ、なんだよここ。ごみ溜めじゃねえか」

リリィ「汚いですわ」

心の扉を抜けた先には、悪臭漂うゴミ捨て場の様な場所が広がっていた。

ジーク「おっさんの心の中をこんなにしやがって！絶対にゆるせねえ」

レオン「そうだな、マモノを見つけるとするか」

リリィ「さっさと倒して、早く帰りましょう」

ゴミ捨て場の中を探索していると、遠くから大きな音が聴こえて来る。

??? 「グゴゴゴゴゴ」

ジーク「なんか音がするぞ」

リリィ「イビキかしら？」

レオン「行ってみるぞ」

イビキの聴こえる方へ行ってみると、そこには巨大なハッピーター
ンみたいな形の生き物がいた

ジーク「うわあ、でけえー」

レオン「こいつを倒すのは、骨が折れそうだな」

リリィ「変な生き物ですわね」

???「グゴゴゴゴゴ」

レオン「寝てるようだし、サクッと切って終わらせるか」

マモノに近寄り、剣で切ろうとしたその時、突然寝返りを打ち始め
る。

レオン「なに!？」

ジーク「危ないぞ避けろ!」

リリィ「キャー!」

三人は危機一髪の所で回避する事に成功したが、ゴミの中に突っ込
んでしまう。

レオン「二人とも大丈夫か？」

リリィ「大丈夫じゃありませんわ・・・」

ジーク「クッセー!」

???「グゴゴゴゴ」

ジーク「くっそー!頭にきたぜ」

ジークは持っていた槍をマモノめがけて投げつける。

ズシュ!

???「イデエエエエエエ!!!」

ジーク「よっしゃ、ざまあないぜ」

「???」「ダレダオマエラァ!！」

レオン「お前こそ誰だ？」

怠惰「メンドクセーケド、オシエテヤル。オレノナハタイダ」

ジーク「鯛だかなんだかしらねえが、今すぐぶちのめしてやるぜ!」

怠惰「グフッフッフ。オマエラゴトキニ、オレハタオセナイ」

ジーク「上等だオラァ! かってこいや」

怠惰「ヤダネ」

ジーク「このやろー!」

レオン「ジーク、落ち着け!」

怠惰の挑発に乗り、真正面から向かっていくジーク。

ジーク「心配すんなって、こんなデカイだけの奴に負けるかよ」

怠惰「グフッフッフ」

案の定ジークめがけ寝返りを打ち始めるが、今度は先ほどよりも数倍早くなっていた。

ジーク「ぐおおお、こんなの聞いてねえぞ!」

怠惰「グフッフッフ」

なんとか盾で防ぐ事はできたが、押し潰されるのは時間の問題に見えたので、急いでレオンが助けに向かう。

レオン「リリィ、援護を頼む」

リリィ「まかせて!」

レオンは怠惰のもとに駆け寄ると、体を何度も何度も切りつけ、リリィは離れた場所からムチを打つ。

ザシュ！ザシュ！バチイン！

怠惰「コレハタマラン」

ジーク「チャーンズ！」

二人の容赦ない攻撃に、怠惰が怯んで体を退かせると、その隙にジークがその場を離れる。

ジーク「いやあ、助かった」

怠惰「ブツブツシテヤルドオオオン！」

リリィ「また来ますわ！」

レオン「一旦逃げるぞ！」

ジーク「うえーい」

三人は全力で走り、心の扉へと引き返す。

ジーク「あいつは追いかけてこないみたいだな」

レオン「面倒なんだろう」

リリィ「それで、どうしますの？」

レオン「ロバート王は、心の剣でトドメを刺すと言っていたが、攻撃が効いているようには見えなかった」

ジーク「そうだなあ、グフグフ笑ってたしなあ」

レオン「どこかに弱点がないものか」

リリィ「そういえば、背中に宝石のようなモノがありましたわ」

レオン「背中か・・・」

ジーク「でもよー、あいつ寝てるから背中なんて攻撃できないぜ？」

レオン「俺に考えがある、ジーク耳を貸せ」

ジーク「ん？」

二人「ヒソヒソ」

ジーク「オーライ、任せときな」

レオン「リリイは離れた場所から敵を観察してくれ」

リリイ「わかりましたわ」

レオン「それじゃ、作戦開始だ」

ジーク「鎧は脱いでおくか」

レオンの突然の提案により、作戦を開始する事となった。

怠惰「ヌーン？オマエマタキタノカ？メンドクセーナア」

ジーク「そう言うなって、俺と遊ぼうぜ。それと槍は返してもらおうぞ」

先ほど投げて怠惰の体に突き刺さった槍を回収する。

ザシュ！ザシュ！

怠惰「イデエエエエエエ！！」

ジーク「わりいゝ、抜こうと思ったら刺しちゃった」

怠惰「グオオオオオオオオ！！」

さすがに腹が立ったのか、高速寝返りを繰り返しながらジークに突進していく。

ジーク「へへへ、こっちだこっち」

鎧を脱いだジークは風のように早く、高速寝返りでも追いつく事はできなかった。

怠惰「サソッテオイテ、ニゲルノカ……。メンドクセエナ」

追いかけるのが面倒になってきたのか、怠惰が戻ろうとする。すると、再び槍で突き刺し挑発する。

ザシュ！ザシュ！

怠惰 「イデエエエエエ！」

ジーク「へへへ、バーカ」

怠惰 「クソガアアアアアアア」

こんな事を何回か繰り返し、ようやくレオンに指定された場所に到着した。

すると、ジークは急に立ち止まり、振り返ったと思いきや、突進してくる怠惰の巨体を両手で受け止める。

怠惰 「ナ、ナンダ!?」

ジーク「ここまでの移動ご苦労さん」

怠惰「クソツ、ワナカ！ハヤクモドラネバ！」

動きを止められ、逃げようとする怠惰。

しかし、ジークの魔の手からは逃れられなかった。

ジーク「へっへっへっ、逃がさないぜええええ!!」

逃げられないように、巨体を持ち上げ始める。

怠惰 「ナンドトオオオオン!?」

ジーク「く、くっそお。重いぜ・・・」

これだけの巨体を持ち上げるのは無理かと諦めそうになるジーク。その姿を見ていたリィが、怒りの闘魂注入をする。

レオン「元の世界に戻ったか」

ジーク「だぁー！疲れた」

リリィ「お風呂に入りたいですわ・・・」

おっさん「そろそろ目を開けていいかぁ？」

ジーク「おう、いいぜ」

おっさん「それでえ、マモノってのは倒せたのかぁ？」

ジーク「おうよ、やる気出てきただろ？」

おっさん「そういえばぁ、なんだか元気になったなぁ」

レオン「（喋り方は変わってないな）」

ジーク「ハッハッハ、よかったよかった。これで一件落着だぜ」

おっさん「よーし！元気が出てきた所で、三人にお礼をしよう」

ジーク「おおー！マジでえー！？」

おっさん「三人共、汚れてて臭いからなぁ。おっさんのホテルに泊めてやるお」

ジーク「おっさん気が利くぜー」

リリィ「ホテルにはお風呂がありますの？」

おっさん「あるぞおあるぞお、でっかいのがあるぞお」

リリィ「まぁ！素敵ですわ♪」

レオン「おっさんの厚意に甘えようか」

おっさんの厚意でサンシャイン最大のホテル、サンシャインホテルに泊めてもらえる事になった。

―サンシャインホテル―

おっさん「ここがおっさんのホテルだぞお」

ジーク「どひゃー！でっけー」

おっさん「そうだろおでっかいだろお」

従業員「社長！」

ホテルに入ると、従業員らしき男がおっさんのもとに駆け寄ってくる。

おっさん「やあやあ、仕事は頑張っているかあ？」

従業員「社長が全然出社なならないので、皆パニックですよ」

おっさん「そうかあ、それはすまなかったなあ。でも、もう大丈夫だ」

おっさん「後ろにいる三人のおかげでな、すっかり元気だぞお」

従業員「それはよかった。皆様、社員一同に代わりお礼を申し上げます」

レオン「仕事でやったまでだ、気にする事は無い」

おっさん「それより君、彼等を泊めてあげるから、部屋に案内してあげなさい」

従業員「わかりました。皆様お部屋にご案内致します」

従業員に案内されて、それぞれの部屋に入る。

―サンシャインホテル レオンの部屋―

レオン「ふう、疲れたな……。そういえば、マモノを吸い込んでから剣の様子が変だな」

トントントントン！

レオンが考え込んでいると、誰かがドアをノックする。

レオン「開いてるよ」

ガチャ！

ジーク「レオン、風呂いこうぜ」

レオン「ああ、そうだな」

ジーク「リリイも誘うか」

二人は部屋を出て、隣のリリイの部屋と向かう。

ーサンシャインホテルー

トントントントン！

ジーク「リリイ、風呂いこうぜー」

ジーク「・・・」

レオン「寝てるんじゃないか？」

ジーク「いやいや、あんな汚れたまま寝ないだろ」

レオン「それじゃあ、お前に誘われるのが嫌とか」

ジーク「ありえるから困る」

トントントントン！

レオン「リリイ、風呂に行かないか？」

レオン「・・・」

ジーク「こりゃいいいな」

レオン「そうだな、俺達だけで行くか」

二人だけで風呂に入る事にして浴場を探す、一向に見つかる気配がなかった。

ジーク「このホテル広いな」

レオン「シュタイン城よりでかいかもな」

ジーク「ええい！諦めるものか！」

再び浴場を探し回っていると、前方からリリイが歩いてくる。

リリイ「あら？二人ともどうなさったの？」

ジーク「風呂探してんだよ」

リリイ「浴場なら屋上にありますわよ」

ジーク「なにー！？」

レオン「どうりで探しても見つからない訳だ」

ジーク「無駄にシャレた事しやがってえ・・・」

リリイ「それじゃあ、わたくしは部屋に戻りますわね」

レオン「ああ、ありがとう」

リリイと別れ、屋上へと向かった。

―サンシャインホテル 大浴場―

屋上に着いた二人は、体を綺麗に洗って湯船に飛び込む。
バシャーン！

ジーク「うつひょー！気持ち良い」

レオン「生き返るな」

おっさん「やあやあ、二人とも」

ジーク「おっさんも風呂入ってたのか」

おっさん「折角、心が綺麗になったんだ、体も綺麗にしたいだろお？」

ジーク「そりゃそうだな」

レオン「そうだ、おっさん」

おっさん「なんだあ？」

レオン「この町で、他にマモノにとり憑かれている人間がいらないか調べて貰えないか？」

おっさん「ああ、いいぞお」

レオン「すまないな」

レオン「(残りのマモノは11体、あんな奴がゴロゴロいるとなれば厄介だな・・・)」

ジーク「レオン、そんなしかめっつらでなに考えてんだ」

レオン「もうゴミ捨て場で戦うのは嫌だと思ってな」

ジーク「ちげえねえな」

おっさん「さてさて、おっさんは先にあがるよ」

ジーク「あいよー」

レオン「俺たちはもう少し温まるか」

それから30分程、湯船に浸かり、十分に温まった所で風呂を出て部屋に戻る二人。

―サンシャインホテル―

ジーク「ああ、のぼせたあ」

レオン「長く浸かりすぎたな・・・」

ジーク「そいじゃ、俺はもう寝る」

レオン「ああ、俺も寝るよ」

部屋に戻った二人は深い眠りについた。

―サンシャインホテル　レオンの部屋―

そして翌朝。ドアのノック音で目が覚める。
トントントントン！

レオン「んー・・・」

ジーク「入るぞ」

ガチャ！

ジーク「おっさんがごちそうしてくれるってよ」

レオン「ふわあ、そうか」

ジーク「早く行こうぜ」

レオン「着替えるから先に行っててくれ」

ジーク「オーライ、リリィに声かけてくる」

そう告げると部屋を出ていく。

―サンシャインホテル―

トントントン！

ジーク「リリィー、メシ食いにいこうぜー」

ジークの呼び声に反応してドアが開く。
ガチャ！

リリィ「朝から騒がしいですわね」

ジーク「おっさんがごちそうしてくれるんだぜ」

リリィ「それはいいけど、レオンは？」

ジーク「着替え中」

リリィ「ふう〜ん」

そこに着替えを終えたレオンがやってくる。

レオン「待たせたな」

リリィ「あら！わたくしが選んで差し上げた服をもう着てらっしゃるのね♪」

レオン「昨日の戦闘で服が汚れてしまったからな」

リリィ「お似合いですわよ」

レオン「そりゃどうも」

ジーク「はやく行こうぜ」

三人揃った所で、1階のレストランへと向かう。

―サンシャインホテル レストラン―

ジーク「おっさーん！連れてきたぜ」

おっさん「やあやあ、用意ができてるよ」

レオン「ご馳走になります」

おっさん「おいしい、料理運んできて」

三人が席に着くと、料理が次々と運ばれてくる。

料理人「おまたせしやした」

ジーク「うひょー！うまそう」

料理人「フルコースとなっておりやす」

おっさん「さあさあ、召し上げれ」

三人「いただきます」

レオン「この料理うまいな」

リリィ「ええ、本当においしいですわ」

ジーク「ふほひほっへはへっへひいはは」

レオン「飲み込んでから喋れ」

ジーク「ゴクン。少し持って帰っていいかな？」

おっさん「いいぞいいぞ、シェフ！お弁当作ってあげなさい」

料理人「へーい」

三人はお腹いっぱいご馳走になり、お弁当まで持たせてもらった。そして、おっさんとの別れの時はやってきた。

おっさん「レオン君、君に頼まれていた調査だが」

レオン「何かわかりましたか？」

おっさん「おっさん以外に、とり憑かれた人間はいなさそうだよ」

レオン「そうですか……。お世話になりました」

ジーク「おっさん！ 弁当ありがとな！」

リリィ「今度はお父様も連れてきますわね」

おっさん「それじゃ、また遊びにおいで」

おっさんに挨拶を済ませた三人はホテルの外に出る。

―サンシャイン―

ジーク「んで、次はどこ行くんだ？」

リリィ「このまま先に進めば、港町ミウミウに着きますわ」

ジーク「うーん、港にギャルはいなそうだな」

レオン「またおっさんと仲良くなればいいだろう」

ジーク「そうだな、そうするか」

こうして、サンシャインで怠惰を倒した一行は、港町ミウミウを目指して出発するのであった。

第三話 完

人魚と海賊（前書き）

サンシャインを出発した三人は、港町ミウミウを目指して街道を歩いていた。

人魚と海賊

―海沿いの街道―

ジーク「ヒュー、暑いなあ」

レオン「だから鎧を脱げって」

ジーク「やーだー」

リリィ「どうしてそんなに鎧に執着してますの？」

ジーク「これにはふかあゝい訳があってだな」

レオン「そうかそうか」

リリィ「レオンー、おんぶしてくださらない？」

レオン「断る」

リリィ「そんな事言わずにいゝ」

レオン「ジークにしてもらえ」

リリィ「いやですわ！」

ジーク「俺の話をきけえーい！」

レオン「また今度な」

ジーク「ぐぬぬ」

そんな話をしているとミウミウに到着する

―ミウミウ―

リリィ「ここが海の玄関と呼ばれている町ですわ」

レオン「すごい船の数だな」

ジーク「おい、アレ見てみるよ」

ジークが指差す方を見ると、網の中で泣いている人魚の少女がいた。

リリィ「かわいそうですわね」

ジーク「女の子を捕らえるなんて許せないぜ」

レオン「そうだな」

ジーク「待ってろよー！騎士が助けにいくぜー！」

人魚を助けに港の方へ走り出すジーク。

―港―

人魚「えーん、だしてよー」

彼女は肩まで伸びた青い髪に琥珀色の瞳を持ち。身長132cm。色白で童顔。

服装の方は貝殻ブラのみで、上半身はムチムチ、下半身はピチピチしている。

漁師「ダメだダメだ。お前は高く売れそうだからな」

ジーク「おっさん！そこまでだ」

漁師「ぬっ！なんだ小僧」

ジーク「小僧じゃねえ、ジークニール様だ」

漁師「それで、俺になんの用だ？」

ジーク「人魚ちゃんがかawaiiそうだろ？逃がしてやれよ」

漁師「これは俺が捕まえたもんだ、どうしようが俺の勝手だろ？」

ジーク「それは違うな」

漁師「ぬわぁにい？」

ジーク「世界中の女の子は全て俺のモノだ」
レオン「それも違うだろ」

後から来た二人も話しに参加する。

漁師「なにを言うかと思えば・・・、仕事の邪魔だ！あっちいけ」
ジーク「いや、力づくでも助けてやるぜ！」

レオン「待てジーク」

ジーク「止めるなレオン！」

リリィ「珍しく真剣ですわね」

ジーク「ここであの子助ければ、俺に一目惚れするんだ！」

レオン「わかったから、話を聞け」

ジーク「ぬう・・・」

レオン「俺に試してみたい事がある」

リリィ「なんですか？」

レオン「見てのおたのしみだ」

レオンが意識を集中し始めると、心の剣から黒いモノが飛び出し、
漁師の中に吸い込まれていく。

レオン「おっさん、人魚を売るなんて面倒じゃないか？」

漁師「なにいつてんだ？そんなわけ・・・、そんな・・・わけ・・・」

漁師「はあ・・・、だるいなあ」

レオン「人魚を俺にukれないか？」

漁師「そうだなあ・・・、でもなあ・・・、網から出すのめんどいなあ」

レオン「自分で出すよ」

漁師「そうかあ？ならくれてやるよお」

レオン「遠慮なく頂くとしよう」

漁師「それじゃあ、俺は家に帰るよ・・・」

漁師は面倒臭そうにその場を離れていく。

ジーク「ヒュー、やったな」

リリィ「なにをなさったの？」

レオン「怠惰が持っていた負の感情を使って、無気力状態にした」

ジーク「なんも見えなかったぜ？」

レオン「心の扉と一緒で、所有者にしか見えないんだろう」

ジーク「折角だし、技に名前をつけようぜ？」

レオン「そうだな・・・、【脱力】とでも呼ぶか」

ジーク「普通だな」

人魚「おにいさん達ー！たすけてよー！」

レオン「すまん、忘れてた」

ジーク「よーし！今助けてやるぜ！」

ジークは槍を使って網を破り、人魚を海に放してあげた。
バシャーン！

人魚「ありがとー」

ジーク「じゃあ俺とデートしようぜ」

人魚「やだー」

レオン「フハハハ！人魚にもフラれたな」

ジーク「ちくしょおおおお！！」

人魚「あはは」

ジーク「それじゃ、名前教えてくれよ」

人魚「マリンだよ」

ジーク「かわいい名前だな」

マリン「お兄さん達も教えてよー」

ジーク「知りたいか？」

レオン「俺はレオンハルト。その鎧男がジークニール」

リリィ「わたくしはリリィと申しますわ」

マリリン「よろしくね♪」

ジーク「俺の出番が・・・」

レオン「マリリン、聞きたい事があるんだが」

マリリン「なーに？」

レオン「知り合いに、最近性格が変わった人はいないか？」

マリリン「うーん、そういえばあゝ、アクマクアのお姫様がゝ、最近怒りっぽくなってるらしいよ」

レオン「アクマクアとは？」

マリリン「人魚の町だよ」

レオン「それは何処にあるんだ？」

マリリン「海の中」

レオン「ふーむ、マモノの仕業かどうか調べようにも、海の中ではな・・・」

マリリン「マモノってなーに？」

レオン「実はかくかくしかじかでな」

マリリンに事情を説明する。

マリリン「ふーん、大変なんだね」

ジーク「そうなんだよ、大変なんだよ」

レオン「ここで足踏みしていても仕方ない、情報を集めに行くか」

リリィ「そうですわね」

ジーク「マリリンまたなー」

三人がその場を離れようとする、マリリンが呼び止める。

マリリン「みんな、まってよー」

ジーク「やっぱり、俺とデートしたくなったか？」

マリリン「ちがうよー。あたしも連れてって欲しいの」

ジーク「ん？どうしてだ？」

マリリン「ここまで船で運ばれたから、アクマクアへの帰り道がわからなくて・・・」

リリィ「それは大変ですわね」

レオン「連れて行くのは構わないが、そもそも陸を歩けるのか？」

マリリン「うん！でも、砂浜みたいな場所がないと1人じゃ上がれないの」

ジーク「ほらよ、掴まりな」

海面にいるマリリンに槍を差伸べて、掴まった所を引き上げる。

マリリン「ありがとー」

ジーク「本当に歩けるのか？」

マリリン「みてて！」

マリリンが一生懸命歩いて見せるが、どう見ても跳ねているだけだった。

ジーク「前には進んでるけどな・・・」

レオン「フハハハ！面白いぞ」

マリリン「こう見えても、海でずっと泳いでるから下半身は強いんだよ！」

ジーク「ほーう、なるほどな」

レオン「かなり目立つから、絶対に1人で行動したらダメだぞ？」

マリリン「はい♪」

人魚の少女マリリンを仲間に加え、一行は情報集めに戻るのだった。

—ミウミウ—

レオン「さて、何処から手を付けるか」

ジーク「情報と言ったら酒場だな」

レオン「ジークにしてはまともな意見だ」

ジーク「俺だってたまにはな？」

レオン「そうだな」

リリィ「港町ですから、1軒くらいはありそうですわね」

マリン「れつつごと」

レオン「まあそう慌てるな、あそこのご婦人に聞いてみよう」

ジーク「お前のナンパテクを見せてもらうぜ」

仲間が見守る中、女性に酒場の事を聞きに行くレオン。

レオン「その綺麗なご婦人」

おばさん「？」

レオン「今、魚をさばかれている貴方ですよ」

おばさん「あたしかい？」

レオン「そうです貴方です」

おばさん「綺麗だなんてやだねえ」

レオン「ハハハ、私は嘘がつかないもので」

ジーク「(今まさについてるな)」

おばさん「あたしに何の用だい？」

レオン「酒場が何処にあるかご存知ですか？」

おばさん「酒場なら旦那が知ってるから案内させるよ」

レオン「よろしいのですか？」

おばさん「どうせろくに仕事もしないで、ふらふらしてる宿六だか

らね。それくらい問題ないよ」

レオン「ありがとうございます」

そう言うのと、お婆さんは家に入り旦那を大声で呼ぶ。

お婆さん「アンタアアアア！！ちよつとこっち来な！！」

レオン「（すごい迫力だな）」

すると、家の中からマジでダメそうなおっさんが出てくる。

マダお「なんだよ母ちゃん」

お婆さん「このお兄さんがね、酒場に行きたいそうなんだよ。あんな暇だろ？案内してあげな！」

マダお「めんどくさいなあ」

お婆さん「あたしに殺されるか、酒場に行くかどっちか決めな」

マダお「わかったよ、行くよ」

マダお「そんじゃ兄さん、さっさと行こうか」

レオン「お願いします。おまえ達、行くぞ」

ジーク「おまえもなかなかやるな」

レオン「まあな」

リリィ「わたくしにも、あれくらい言って欲しいですわ」

レオン「その内な」

マダおに案内されて、酒場に到着する。

マダお「ここだよ」

レオン「ご苦労だった」

マダお「それじゃ俺は家に帰るよ」

ジーク「おっさんまたな」

マダおは家に帰り、一行は酒場に入る。

―酒場―

酒場に入っただけみると、まだ昼という事もあり、客がおらず閑散としていた。

そんな中で、暇そうにしていたマスターから話を聞いてみる事にした。

マスター「ここは子供の来る所じゃないぞ？」

レオン「話だけでも聞かせてもらえないだろうか？」

マスター「話が聞きたいなら、注文しな」

レオン「それじゃあミルクを」

マスター「ほらよ」

レオン「リリィ、支払いを頼む」

リリィ「お任せください♪」

レオン「それじゃあ、話を聞かせてくれ」

マスター「何が聞きたい？」

レオン「この辺りで、最近性格が変わった人間を知らないか？」

マスター「また変な質問だな……。まあいい、漁師の男がナマケモノになっているらしいぞ」

レオン「それは知ってる」

マスター「俺が知っているのはそれくらいだ」

レオン「そうか・・・」

ジーク「どうするよ？」

リリィ「町で聞き込みしますの？」

レオン「つい先ほど起きた出来事を既に知っているようだから、このマスターの情報網は確かだ」

ジーク「そうだなあ」

レオン「そのマスターが知らないとなれば、この町には特に異変はないのだろう」

ジーク「そいじゃ次の町に行くか？」

レオン「そうだな」

話がまとまると、レオンはテーブルの上にあったミルクを飲み干す。

レオン「ゴクツゴクツ。マスターごちそうさん」

ジーク「よっしゃ行くか」

一行が酒場を出ようとすると、マスターが呼び止める。

マスター「お前達、この先の町に行くなら諦めた方がいい」

ジーク「なんでだ？」

マスター「橋が落とされているんだ」

ジーク「道は一本しかないのか？」

マスター「ああ、橋を通るしかないよ」

ジーク「オーライ、ありがとよ」

話が済んだので外に出る。

—ミウミウ—

ジーク「マスターの言ってた事が本当なら、これ以上進めないぜ」

レオン「かといって戻ろうにも、シュタイン兵が待ち伏せていそうだしな」

リリィ「困りましたわね」

マリリン「ねーねー、ふねにのろうよ」

レオン「そうか！その手があったな」

ジーク「お手柄だぜ、マリリン」

マリリン「えへへ」

リリィ「それじゃあ、船着場を探しましょう」

船に乗るために、船着き場を探す四人。

しばらく海沿いを歩いていると、大型の船が停泊している栈橋を見つける。

ジーク「見つけたな」

マリリン「船がおっきーよ！」

ブォォォォォォォォ！！

ジーク「うおっ!？」

レオン「まずいな」

四人が船を眺めていると、突然汽笛が鳴り始める。

リリィ「急がないと出航してしまいますわ！」

レオン「走るぞ！」

マリリン「あたし走れないよー」

ジーク「しょうがねえな」

急いで船に向かう四人。しかし、マリリンは走れないので、ジークが抱き抱えて走る。

四人が船の前に到着すると、渡しの前には船員が立っていた。

船員「君達、急がないと出航しちゃうよ」

レオン「リリィ、支払いを頼む」

リリィ「はい♪」

ジーク「はぁ・・・はぁ・・・、マリン・・・重いな・・・」

マリン「おもくないよ！」

船員「よし、金はもらった。はやく乗りな」

金を支払い、急いで船に乗り込んでいく。

船員「出発」

四人が船に乗り込んだと同時に、渡しが外され船は出港する。

――船上――

ジーク「ぷはぁ、間に合ったな」

マリン「ふねふねー♪」

レオン「勢いで乗り込んでしまったが、どこに向かっているんだ？」

リリィ「そういえば行き先を確認していませんでしたわね」

ジーク「まあいいじゃねえか。今は船旅を楽しもうぜ」

レオン「そうだな」

ジーク「なんか走ったら腹減ったな。おっさんから貰った弁当食おうぜ」

三人はビーチのおっさんから貰ったお弁当を食べ始める。

マリィ「あたしもたべるー」

ジーク「はらよ」

マリィ「もぐもぐ。おいしー」

レオン「あのホテルの料理は美味いよな」

リリィ「クインシーン城の料理よりも美味しいですわ」

ジーク「ふはひんほうおほうひお、ほんはひほいひふははっはひは」

レオン「飲み込んでから喋れ」

ジーク「ゴクン。シュタイン城の料理も、そんなに美味しくなかったしな」

レオン「野菜中心だったからな……。男には辛い町だ」

リリィ「だからわたくしと結婚してクインシーンの王になるべきですわ♪」

レオン「それは無理だ」

ジーク「そうだよなあ、封印を守らないといけないしな」

リリィ「それならわたくしが王妃になりますわ♪」

レオン「それも無理だ」

リリィ「むー！」

マリィ「ふたりは恋人なの？」

リリィ「許婚ですよ」

レオン「親が勝手に決めた事だ」

ジーク「そうだそうだ」

リリィ「お父様は関係ありませんわ。自分の意志で決めたのです」

レオン「俺も自分の意志で結婚は断る」

リリィ「そんな事言っていられるのも今の内ですわ♪」

レオン「なんだその自信……」

ジーク「いいよないよない、俺にもカワイイ恋人が現れないかな」

レオン「リリィをくれてやる」

ジーク「いらねー」

リリィ「失礼ですわね！」

そんな話をしながらお弁当を食べていると、辺りが急に騒がしくなる。

乗客「キャー！」

船員「なんだお前たちは！！」

ジーク「ん？なんか騒がしいな」

マリン「おまつりー？」

レオン「それは違うと思うぞ」

リリィ「見に行きましょう」

四人は騒ぎの起きている場所へ向かってみると、そこには武装した女性が人質をとって何かを要求していた。

武装女「あたしらはミーノウ海賊団だ」

人質女「たすけて」

武装女「あんたら！早く食料を持ってきな！」

船員「そんな事、俺たちに決められる訳ないだろ」

武装女「じゃあ船長を呼びな！」

船員「ちよっと待ってろ」

船長を呼びにその場を離れる船員。

ジーク「ヒュー、あの女できるぜ」

レオン「見ただけでわかるのか？」

ジーク「そりゃな」

マリン「ねーねー、あの人達なにやってるの？」

ジーク「ありゃ海賊つつてな、人を誘拐したり物盗んだりそりゃ悪い奴らだ」

マリン「こわーい」

レオン「しかし、海賊にしては数が少ないようだが」

ジーク「そういうやそうだな」

そうこうしていると、先ほどの船員が船長を連れて戻ってくる。

船長「わたしが船長です」

武装女「あんたが船長かい、うちの船にありったけの食料を積み込みな！」

船長「うーむ、仕方ないな。野郎共！準備するぞ」

船員「へい！」

船長「少々お待ちを」

武装女「早くしなよ」

船長と船員達が、食料を運び出す準備の為に船内へと戻る。

ジーク「食料しか要求しないなんて変な海賊だな」

レオン「盗みにかわりはないだろう」

マリン「でもでも、悪そうな人には見えないよ？」

ジーク「俺も同感だ」

レオン「勘か？」

ジーク「いや、あんなカワイイ娘が悪い子な訳が無い」

レオン「・・・」

数分後。

ジーク「レオン、トイレ行きたいんだが」

レオン「勝手に行け」

ジーク「いやいや、場所がわからん」

レオン「船内を適当に探してれば見つかるだろう」

ジーク「手伝ってくれよう。な？な？」

レオン「わかったわかった」

トイレを探しに船内へ向かう二人。

―船内―

ジーク「やっべー、見つかんねえ」

船内をウロウロしていると、なにやら話し声が聞こえてくる。

レオン「シッ！静かにしろ」

ジーク「ん？」

レオン「話し声が聞こえる」

ジーク「こっちだな」

どうやら、話し声は貨物室の方から聞こえてくるようで、二人は盗み聞きを始める。

船長「あの女海賊め、ナメた事しやがって」

船員「お頭！爆弾の準備ができやした！」

船長「よーし、気づかれないように船に載せるんだぞ」

船員「アイアイサー」

船長「グフフ、これで奴らもおしまいよ」

船員が出口の方へ大きな荷物を運び始める。

ジーク「やべっ！こっちくるぞ」

レオン「この部屋に隠れるぞ」

二人はとっさに近くの部屋に隠れる。

ジーク「ふう、あぶなかった」

レオン「狭いな・・・」

ジーク「おおー！ここトイレじゃーん。ラッキー」

レオン「するなら俺が出てからにしろよ」

ジーク「わかってるって。つうか、あいつら爆弾って言ってたよね？」

レオン「ああ、言ってたな」

ジーク「やばいじゃーん。早くあの子に知らせてあげようぜ」

レオン「海賊を助けるのか？」

ジーク「そりゃ、海賊は悪い奴らだけどよ。なんにも殺すことないだろ？」

レオン「ふう・・・。俺が適当にやってみるから、お前はトイレを済ませておけよ」

ジーク「オッケー」

レオン「・・・。誰もいなそうだな」

レオンは外から物音がしない事を確認すると、トイレから飛び出し、武装女のもとへ走り出す。

―船上―

レオン「はあはあ・・・。（爆弾はどこだ？）」

リリィ「レオン、どうなさったの？」

レオン「実はな・・・、ごによごによ」

リリィ「それは大変ですわね」

レオン「荷物は既に運ばれてしまったか？」

リリィ「ええ、既に彼女達の船に」

レオン「仕方ないな」

レオンが武装女の前に飛び出していくと、武装女が警戒して呼び止める。

武装女「おい、おまえ！止まりな！」

レオン「話を聞いてくれ」

武装女「いいから戻りな！」

レオン「さっき、船員達が運び入れた荷物の中に爆弾が入ってるんだ」

武装女「そんな嘘には騙されないよ」

レオン「俺が嘘をついてなんの得があるんだ？」

武装女「それは・・・」

レオン「それじゃあこうしよう。もしも爆弾が入ってなければ俺の命をくれてやる」

武装女「なっ!？」

船長「コラ！勝手になにを言っているんだお前は！」

レオン「お前は黙っているろ」

意識を集中させると、船長に向かって脱力を放つ。

船長「はあ・・・」

レオン「早く決断しないと爆発するぞ？」

武装女「船に乗りな」

ジーク「俺もいくぜー」

トイレを済ませたジークが駆け寄ってくる。

武装女「何だお前は？」

ジーク「そいつの親友」

レオン「人畜無害な男だ、気にするな」

ジーク「そういう事」

武装女「まあいいさ、ついてきな。」

武装女に連れられて、人質と共に船に乗り込む二人。

武装女「マイコ！さっきの船員が持ってきた荷物を開けな」

マイコ「ほえ？後ろの二人だれ？」

武装女「気にするな」

マイコ「はーい」

マイコと呼ばれる女性が荷物を開け始める。

マイコ「あけたよー」

武装女「爆弾なんて何処にあるんだい？」

レオン「荷物は一つなのか？」

マイコ「いんやー、後二つあるよ」

レオン「そちらも調べたい」

マイコ「あいよー」

残りの箱を開けると、一番最後に積まれた箱の中から、大量の火薬と時限爆弾が見つかる。

武装女「ツチ、ナメたマネしてくれたね・・・」

レオン「これで信用してもらえたかな？」

武装女「ああ、疑って悪かったね」

マイコ「姉さん、これどうすんの？」

武装女「こんなでかいものを運ぶとなると厄介だね」

ジーク「ここは俺にまかせな」

軽々と片手で箱を持ち上げるジーク。

マイコ「うひゃ、すごいっすね」

武装女「なんて馬鹿力なんだい」

ジーク「そいじゃ捨ててくる」

ジークは箱を持って船の甲板に上がると、海に向かって投げ捨てる。
ザッバーン！

ジーク「あの箱には爆弾が入ってるぞー」

その言葉を聞いた乗客達が慌てふためき、その隙にレオンがリリイとマリンを呼び寄せる。

乗客「キャーキャー」

レオン「リリイー！マリン！こっちの船に乗れ！」

マリン「はい」

リリイ「マリン、転ばないように気をつけてね」

マリン「うん」

二人がレオンのもとに到着するやいなや、海に沈んでいた箱が大爆

発を起こす。
ザッバーン！

マリク「あぶなかったね」

レオン「そうだな」

リリィ「波がこちらにきますわ！」

武装女「お前達！早く船の中に入りな！」

言われるままに船の中に入ると、武装女がハッチを閉める。

――潜水艇――

全員が中に入ると、爆発の衝撃で起きた波で、船が大きく揺れ始める。

リリィ「キャー」

レオン「抱きつくな」

ジーク「キャー」

武装女「くつつくんじゃないよ！」

激しい揺れは次第におさまっていく。

ジーク「ヒュー、危なかったぜ」

マリク「目がまわるうゝ」

リリィ「気分が悪くなりましたわ・・・」

レオン「みんな無事そうだな」

武装女「あんた達、礼を言うよ」

ジーク「じゃあ俺とデートしようぜ」

武装女「断る」

ジーク「ぬくん」

マイコ「あたしがデートしてあげよっか？」

ジーク「マジでー!？」

マイコ「ウソぴょん」

ジーク「ぐぬぬ！」

レオン「ところで、人質が乗ったままだが」

武装女「この子はあたしの妹だよ」

人質女「ウフフ・・・」

レオン「なるほど、全部芝居か」

マイコ「そういう事っすね」

ジーク「ほら、やっぱり俺の言った通り悪い子じゃなかった」

レオン「疑って悪かったな」

人質女「ヒソヒソ・・・（姉さん、島に戻った方がいいんじゃない?）」

武装女「そうだね・・・。食料は十分手に入れたし、引き上げるか」

レオン「ついでに俺達も連れて行ってくれると助かる」

ジーク「完全に海賊の仲間って思われてそうだしな」

武装女「あんた達には世話になったからね、乗せていってやるよ」

マイコ「お話中の所悪いんすけど、あの船が大砲撃ってこようとしてるっす」

ジーク「なにー!？」

武装女「本性を現したね」

レオン「どういう事だ？」

武装女「話は後だよ。マイコ、潜水しな！」

マイコ「あいあいさー」

マイコが機械を操作すると、船が海に潜り始める。

マリン「みてみてー、海にもぐってるよー」

マイコ「ふふふ、これは海に潜れるスペシャルな船なんすよ」

ジーク「カッコイイな」

武装女「このまま潜行して、島まで行くよ」

マイコ「あいあいさー」

砲撃を避ける為に海に潜ると、島を目指して潜行を始める。

しばらくして落ち着いてきたので、レオンが話の続きを尋ねる。

レオン「先ほどの話の続きを教えてくださいませんか？」

武装女「あの船に乗っていた船員達はね、元は海賊だ」

ジーク「ふえ」

レオン「あの客船は改造されたモノなのか」

武装女「逆さ。海賊船を改造して客船っぽくしてるだけで、中身は海賊船のまんまだよ」

ジーク「そういや、トイレ探してる時に色んな部屋見たけどよ、客船にしては狭いし汚かったな」

レオン「奴らはなんで客船の真似事をしているんだ？」

武装女「乗客から預かった荷物から金品をくすねてるのさ」

ジーク「海賊にしてはせこいな」

武装女「今時、海賊なんてやってても稼げないからね」

ジーク「なのに、お前らはやってんのか？」

武装女「あたしらは金の為にやってる訳じゃないからね」

ジーク「ふえ」

マイコ「みなさん、そろそろ島に着くっすよ」

ジーク「やっと外の空気が吸えるぜー」

こうして、海賊達が根城にしている島へと上陸する事となった。

第四話 完

人魚と海賊（後書き）

脱力…怠惰を人間に憑依させる事で無気力状態にさせる

友情と信頼（前書き）

海賊を助けてしまった一行は、
海賊の潜水艇に乗せてもらい、
海賊達の本拠地のある島へと上陸し
た。

友情と信頼

ーラウミー島 海岸ー

ジーク「すうゝ、はぁゝ。外の空気がうめえー」

リリィ「キレイな所ですわね」

レオン「ここは何処だ？」

マイコ「ラウミー島っす」

レオン「ふむ、わからんな」

マイコ「地図に載ってないような無人島っすよ」

レオン「そうなのか」

武装女「お前達、これからジャングルを通って村に行くよ」

レオン「村があるのか？」

武装女「あたし達が自分で作った村だけどね」

レオン「興味深いな」

マリン「はやくいこー」

ジーク「行こう行こう」

武装女「鎧の奴、お前は荷物を運びな」

ジーク「ええー!？」

武装女「なんか文句あるのかい？」

ジーク「運ばせて頂きます」

一行は村を目指してジャングルに入っていくのであった。

ーラウミー島 ジャングルー

ジーク「重いよ」

マリリン「がんばれー♪」

ジーク「よし、がんばっちゃうぞー♪」

レオン「（単純だな）」

レオン「ところで、こんなに食料を手に入れてどうするんだ？」

武装女「村の子供達に食べさせるんだ」

ジーク「ふえー、お前ら子持ちだったんだな」

武装女「そうだな・・・。とても愛おしい子供達だ」

マイコ「うちらが手に入れた最高の宝っすね」

ジーク「またまた、うまいこと言っちゃって」

マイコ「ふっふっふ」

数分後。

マリリン「うー、あついよお」

リリィ「人魚は暑いのが苦手ですの？」

マリリン「うん。このままだと干物になっちゃうよ」

ジーク「ちよっと食べてみたい気もするな」

マリリン「ひどいよー！」

更に数分後。

ジーク「お、おれも、干物になりそう・・・」

マイコ「がんばるっすよ」

ジーク「お前の声は元氣が出る所か、力が抜けるんだよな・・・」

マイコ「ふふふ」

リリィ「それなら、わたくしのムチを受ければ元氣になるんじゃないかな？」

ジーク「やーだー」

マリリン「もうだめえ」

レオン「大丈夫か？」

マリリン「もうあるけないよう」

レオン「仕方ないな……。背中に乗れ」

レオンは動けなくなったマリリンを背負う。

マリリン「ありがとう」

ジーク「あー！レオンずるいぞー！」

レオン「代わるか？」

ジーク「えっ！いいの！？」

マリリン「やだー」

レオン「だそうだ。諦めてくれ」

ジーク「うわああああん！」

悔しさと切なさど荷物を背負い、勢い良く走りだすジーク。

武装女「なんだ元気じゃないか」

リリィ「本当ですわね」

レオン「あいつの体力は底無しだからな」

更々に数分後。

武装女「そろそろ村が見えてくるよ」

レオン「ふう……。やっとか」

リリィ「さすがに疲れましたわね……」

マリリン「すやすや」

マイコ「人魚ちゃん、気持ちよさそうに寝てるっすよ」

レオン「たくさん跳ね……。歩いたから疲れたんだろう」

リリィ「そうですわね」

マイコ「寝顔がかわいいっすね」

武装女「ハハハ、本当だな」

人質女「村に着いた・・・」

やっとの思いでジャングルを抜けると、そこにはひっそりと村があって、先に到着していたジークが休んでいた。

ーラウミー島 秘境の村ー

ジーク「みんな遅いぜ」

レオン「お前が速すぎるんだ」

ジーク「へっへっへ、俊足のラストナイトって言っても過言ではないな」

マイコ「なんすかそれ」

武装女「みんなー！帰ったぞー！」

武装女が大声を出すと、家から小さな子供達が出てきて駆け寄ってくる。

男の子「お姉ちゃん、おかえりー」

女の子「なんか食べ物ある？」

武装女「ああ、たくさんあるぞ」

女の子「わーい」

マリン「ううん・・・」

子供達の声で目が覚めるマリン。

レオン「起きたか？」

マリン「おはよー」

レオン「おはよう」

マリン「おんぶしてくれてありがとう」

リリィ「この子供達は？」

マイコ「親を亡くした子や、捨てられた子達っす

ジーク「子持ちって、そういう意味だったのか」

マイコ「そういう事っす」

武装女「お前達、そんな所で突っ立ってないで家に入りな」

ジーク「水飲ましてくれえ」

武装女に招待されて、家にお邪魔する事となった。

― 秘境の村 ミーノウ家 ―

武装女「適当に座って寛いでいてくれ」

ジーク「水！水！」

マリン「あたしもー」

マイコ「あいよ」

ジーク「ゴクッ！ゴクッ！ぷふあゝ、生き返るねえ」

マリン「うんうん」

マイコ「この水はうまいっすよ」

ジーク「なんていうか軟らかいっていうか、甘いつていうか、美味

いな」

マリン「うんうん」

武装女「さてと。ようやく一息ついたところで、自己紹介を始めようか」

武装女「まずはあたしからだだが、名前はメラヒⅡミーノウ。ミーノウ海賊団の頭をやっている」

人質女「ヒソヒソ・・・（私はコロモ・・・）」

レオン「（全然聞こえん・・・）」

マイコ「うちはマイコっす。こう見えて頭が良いんすよ」

メラヒ「わかってると思うが、あたしらは姉妹だ」

マイコ「全然似てないっすけどね」

ジーク「本当だな」

メラヒ「次はお前達の番だよ」

レオン「俺はレオンハルト。マモノ退治の旅をしている」

ジーク「おれはジークニール。人呼んで俊足のラストナイト」

リリィ「わたくしはリリィ。レオンの旅を手伝っていますわ」

マリン「あたしはねー、マリンっていうの。人魚だよ」

メラヒ「それじゃあ、自己紹介が済んだ所で、今日はパーッと宴でもしようじゃないか」

マイコ「賛成っす」

コロモ「ヒソヒソ・・・（料理の準備してくるね・・・）」

ジーク「おっ、いいね」

マリン「おまつり♪」

レオン「メラヒ、二人だけで話したい事がある」

メラヒ「わかった、部屋来な」

メラヒに案内され、二人は部屋に向かう。

メラヒ「話ってなんだい？」

レオン「人魚の町アクマクアを知っているか？」

メラヒ「知ってるよ」

レオン「潜水艇で人魚の町へ連れて行って欲しい」

メラヒ「なにか事情がありそうだね」

レオン「マモノ退治の事だな」

メラヒ「そうだねえ……。こっちの頼みを聞いてくれれば送ってやるよ」

レオン「頼みとは？」

メラヒ「ジャングルに住み着いている凶暴なクマを退治してもらいたい」

レオン「クマ？」

メラヒ「ただのクマじゃないよ、キングベアーだ」

レオン「ふむ、わかった。仲間と相談してみよう」

部屋を出てジークのもとへと向かう。

レオン「ヒソヒソ・・・（ジーク、ちょっとこい）」

ジーク「ん？」

ジークを連れて家の外に出る。

——ラウミー島 秘境の村——

ジーク「どうしたあ？」

レオン「クマを倒しに行くぞ」

ジーク「はぁー？」

レオン「クマを倒せば人魚の町に連れていってくれるそうだ」

ジーク「話はわかったが、二人に黙ってていいのか？」

レオン「マリンを護りながらの戦闘は大変だろう？」

ジーク「確かになあ」

レオン「それに、二人を危険な目にあわせたくないしな」

ジーク「その言葉、リリィに聞かせてやったら喜ぶぞ」

レオン「冗談言っていないでいくぞ」

ジーク「うえーい」

二人はジャングルの中へ入っていく。

ーラウミー島 ジャングルー

ジーク「うーん、ジャングルつつつても広すぎないか？」

レオン「確かにな」

ジーク「いきなり目の前に出てきてくれないかね」

レオン「喜べ、出てきたぞ」

二人が探索していると、茂みの中からキングベアーが姿を現した。

ジーク「ラッキー」

レオン「さっさと倒して帰るか」

キングベアー「クマアアアアン！」

ジーク「なんか怒ってるぞ」

レオン「こっちに来るぞ！」

ジーク「俺にまかせなって」

ジークがレオンの前に立ち、盾を構えて反撃姿勢に入ると、キングベアーが二人めがけて突進してくる。

ジーク「へっへっへ、攻撃してこい」

キングベアー「クマアアアアアアン！」

キングベアーはジークめがけてパンチを繰り出すが、盾を使って受け流され、その隙に槍を深く突き刺される。

カァン！ズシュウ！！

キングベアー「イタァイ！」

ジーク「大成功」

レオン「お前も頭を使うようになったな」

ジーク「まあな。今の一撃はかなり手ごたえがあったぜ」

そんなジークの思いとは裏腹に、キングベアーの怒りは激しさを増し、先ほどより凶暴になっていた。

キングベアー「クマアアアアアアン！！」

ジーク「バケモノだー！」

レオン「お前が言うな」

ジーク「もう一回カウンターだぜ」

先程と同じように盾を構え、反撃姿勢に入るが、学習したキングベアーは回り込んでレオンを狙った。

ジーク「なにー！？」

キングベアー「クマアアアアン！」

レオン「こっちか！」

心の剣を使い攻撃を防ぐが、キングベアーの強靱な筋肉の前では、競り負けるのも時間の問題に見えた。

レオン「クッ！まずいな・・・」

ジーク「このクマ、俺を無視しやがってー！こうしてやる！」
ザシュ！ザシュ！

キングベアーの背後から何度も槍で突き刺すが、怒りのあまり痛みを感じなくなり、怯む気配がなかった。

キングベアー「クマアアアン！」

レオン「後は任せた・・・」

ジーク「諦めんなって！」

レオンが諦めかけたその時、キングベアーの背後から一本のムチが飛び出してきて、首をきつく締め上げる。

キングベアー「ギャ・・・ア・・・！」

ジーク「このムチ・・・、リリイか？」

ムチが飛び出てきた方を見ると、そこには木の上に立つリリイの姿があり、クマよりも怒っていた。

リリイ「レオン！わたくしに黙っていくなんて、あんまりじゃありませんこと！？」

レオン「す、すまない・・・」

リリイ「なら結婚してくださいませ♪」

レオン「こ、ことわる・・・」

ジーク「今はそんな事やってる場合じゃないだろうが！」

リリイ「そうでした、クマを倒さないといけませんわね」

そう言うと、リリィはキングベアーが居る方向とは逆の方向に飛び降り、木を滑車代わりに使ってクマを吊り上げる。

リリィ「さすがに重いすわね」

リリィの軽い体重では、キングベアーの巨体を数cmしか浮かばせる事ができなかった。

ジーク「動きを止めただけでも上出来だぜ」

レオン「ああ、助かった」

リリィ「今のうちにトドメを！」

ジーク「よっしゃー、まかせろー！」

ジークは槍を構えると、キングベアーめがけて力一杯に投げる。

ジーク「でやあー！」

投げた槍は見事にキングベアーの胸に突き刺さるが、強靱な筋肉に阻まれ刺さりが浅かった。

ズシューー！！

レオン「浅いな」

ジーク「ここからが本番よ」

そう言って盾を右手に持ち替えると、胸に刺さった槍めがけて投げつける。

ジーク「そいヤー！」

投げた盾は槍の石突き部分に当たり、より深く胸に突き刺さる。

カァン！ズシュシュ！

キングベアー「・・・」

レオン「終わったか」

ジーク「これで、降ろした瞬間に生き返るとかないよな」

レオン「既に息はしていない。大丈夫だろう。リリィ、助かった。もう降ろしていいぞ」

リリィ「はい」

ジーク「ふえー、疲れたなあ」

レオン「ジーク、まだ休むわけにはいかないぞ。クマを村まで運ばないとな」

ジーク「そうだったな・・・」

レオン「今度は俺も手伝うよ」

リリィ「わたくしも手伝いますわ」

ジークが両足を持ち、レオンとリリィがそれぞれ片腕を担ぐ。

ジーク「よいしょっと。じゃ帰るか」

こうして、倒したキングベアーを村に持ち帰るのであった。

ーラウミー島 秘境の村ー

三人が村に戻ってみると、三姉妹が宴の準備をしていた。

ジーク「おーい！クマ倒してきたぞー」

マイコ「うひゃー、すごいっすね」

レオン「これでアクマクアに送ってもらえるな？」

メラヒ「ああ、約束は守るよ」

マリン「みんなー、あたしをおいていくなんてひどいよー！」

レオン「ごめんな」

ジーク「クマでも食べて機嫌なおしてくれよ」

マリン「クマ〜♪」

メラヒ「今日はごちそうだねえ」

コロモ「ヒソヒソ・・・（解体するね・・・）」

キングベアーを解体すると、鍋に投入して煮込み始める。

ジーク「あゝ、良い匂いだなあ」

マイコ「久しぶりの肉っす」

男の子「こいつ、あしがないじょー」

女の子「へんなのー」

マリン「あーうー、ひっぱらないで〜」

メラヒ「二人ともやめないか、マリンが嫌がってるだろう？」

男の子と女の子「ごめんなさーい」

ジーク「イジリたくなる気持ちは、わからんでもないがな」

レオン「フハハハ、そうだな」

コロモ「ヒソヒソ・・・（熊鍋できたよ・・・）」

マイコ「みなさんー、コロモ姉さんが熊鍋できたって、言ってるっすよ」

ジーク「いよっ！待ってました」

メラヒ「そろそろ、宴を始めるとするか」

料理と飲み物がテーブルに運ばれて、全員が席に着くと、メラヒが音頭を取る。

メラヒ「これより宴を始める。乾杯ー！」
一同「かんぱーい！」

宴が始まると、それぞれが好き勝手に飲み食い始める。

レオン「ふむ、熊鍋を初めて食べたが美味いもんだな」

ジーク「煮込んでるから肉がやわらけえな」

リリィ「スープにいいダシがでますわね」

マリン「おいし」

メラヒ「コロモ、皆に舞を見せてやりな」

コロモ「ヒソヒソ・・・（わかった・・・）」

コロモが中央の舞台に上ると、舞を始める。

ジーク「ん？なんの踊りだ？」

レオン「見た事がないな」

マイコ「あれは舞つつて、遙か東にある町で憶えたんすよ」

リリィ「ステキな踊りね」

ジーク「やんややんや」

リリィ「レオン、飲み物が入ってませんわよ。注いで差し上げますわ」

レオン「すまないな」

ジーク「俺にも俺にも」

リリィ「自分で注ぎなさい」

ジーク「ひでえー」

マリン「あたしが注いであげる」

ジーク「クウ！かわいいぜー。リリイも少しは見習えよな」

リリイ「余計なお世話ですわ」

そうこうしていると、あつという間に時間は過ぎていき、夜も更けてきたので宴もお開きとなる。

メラヒ「子供達は寝たかい？」

コロモ「ヒソヒソ・・・（うん）」

マイコ「残りは後片付けっすね」

リリイ「わたくしもお手伝いしますわ」

マリン「あたしもー」

ジーク「ふわあ、ねみい」

メラヒ「お前達もクマと戦って疲れたろ？後は任せて、先に寝てな」
レオン「リリイとマリンが働いているのに、我々だけ先に寝るわけにはいかん」

ジーク「グガー！グガー！」

メラヒ「相方はもう寝てるみたいだけどね」
レオン「・・・」

それから数分後。

リリイ「後片付けが終わりましたわ」

マイコ「人手があると早いっす」

メラヒ「後片付けご苦労だったね。あそこに空き家があるから、そこで寝るといいよ」

レオン「わかった」

マイコ「それじゃおやすみっす」

マリン「おやすみ」

コロモ「ヒソヒソ・・・（おやすみなさい）」

三姉妹と別れ、空き家へ向かう三人。

レオン「ここが空き家か」

扉を開けて中に入ってみると、そこにはベットが二つしかなかった。

マリン「わーい、ふかふか」

初めてのベットに興奮するマリン。

リリィ「ベットが二つしかありませんわね」

レオン「俺は外で寝る」

リリィ「それはいけませんわ！一緒に寝ましょう♪」

レオン「マリンと一緒に寝るといいぞ」

マリン「うん！いっしょにねよう」

リリィ「仕方ありませんわねえ」

レオン「それじゃおやすみ」

マリン「おやすみ」

レオンが二人を部屋に残して外を歩いていると、寝ていたはずのジークが話しかけてくる。

ジーク「うまく逃げたな」

レオン「起きてたか」

ジーク「マリンの声はでかいからな、目が覚めた」

レオン「フツ、そうか」

ジーク「まあ座れって」

レオン「そうだな」

ジークの隣に横になると、夜空の星を眺める。

ジーク「こうしていると、昔を思い出すよな」

レオン「そうだな」

ジーク「なあ、レオン」

レオン「なんだ？」

ジーク「俺は強くなれたのかな」

レオン「どうしたんだ、いきなり？」

ジーク「さっきのクマとの戦いでさ、お前を護りきれなかっただろ？」

レオン「そんな事か」

ジーク「こっちは真剣なんだぜ？」

レオン「お前は強くなった・・・いや、強い。だがそれ以上に、これから出会う敵は強いだろう」

ジーク「そうだよな・・・」

レオン「仲間をもっと頼っても良いのかもしれないな」

ジーク「リリィに助けられたのは事実だしな」

レオン「ああ、俺達が思ってる以上にリリィは強くなっていたな」

ジーク「しつこい所は昔のまんまだけどな」

レオン「フハハハ、そうだな」

長い沈黙が続く。

ジーク「なあ、レオン」

レオン「すー、すー」

ジーク「ん？寝てるのか・・・。毛布毛布」

メラヒ「毛布ならあるぞ」

レオンに掛ける毛布を探しに行こうとすると、近くにメラヒが立っ

ていた。

ジーク「おわっ!？」

メラヒ「騒ぐと起きてしまうぞ」

ジーク「驚かすなよ」。ここでもなにやってんだ?」

メラヒ「お前に毛布を持って行こうとしたら、話し声が聞こえたのでな」

ジーク「聞いてやがったな・・・」

メラヒ「悪いな」

ジーク「まあいいさ、リリイとマリンには言うなよ?」

メラヒ「わかってるよ」

ジーク「ならいいんだが」

メラヒ「余計な事だとは思うが、あたしからもちよつと言わせてもらうよ」

ジーク「ん?」

メラヒ「女ってだけで、仲間外れにされるのは辛いもんだよ」

ジーク「うーん、そんなつもりはないんだけどな」

メラヒ「お前達はそうだろうけど、二人はどう思うかな?」

ジーク「マリン怒ってたしなあ」

メラヒ「そうだろう?これからは二人も頼ってやんなよ」

ジーク「オーライ、レオンと相談しておくよ」

メラヒ「そいじゃ毛布」

ジーク「サンキュー」

メラヒ「あたしは家に戻るよ」

ジーク「おう、おやすみ」

メラヒから毛布を受け取ると、そっとレオンにかけて、自分も寝る事にする。

そして翌朝。

リリィ「レオン！レオン！朝ですよ」

レオン「んゝ・・・」

ジーク「お前は朝弱いよな」

レオン「んゝ・・・」

ジーク「ダメだこりゃ」

マリン「みんなー、朝ごはんもらってきたよー」

マリンが持ってきたカゴを見ると、中にはバナナが三本入っていた。

ジーク「どういう事だ？」

マリン「一人一本だってー」

ジーク「なるほどなるほど、後で食べよう」

マリン「すごいおいしいよ！」

リリィ「もちもちとしていて、とっても甘いですわね」

マリン「レオンもたべなよー」

レオン「んゝ・・・、すまん」

バナナを食べていると、ジャングルの方からメラヒが歩いてきて、四人に話しかける。

メラヒ「潜水艇の用意ができたよ」

レオン「そうだ、アクマクアへ行くんだったな」

ジーク「またあの狭苦しい船に乗るのか」

リリィ「文句言っていないで行きますわよ」

マリン「久しぶりにおうちにかえれる」

四人はメラヒと共にジャングルを抜け、海岸で停泊していた潜水艇

に乗り込む。

―潜水艇―

メラヒ「マイコ、準備はできてるかい？」

マイコ「おっけーっすよ」

メラヒ「それじゃ、後はマイコに任せるよ」

ジーク「ん？お前はこないのか？」

メラヒ「あたしは村の子供達の世話があるからね」

レオン「そうか、忙しいのにすまないな」

メラヒ「マモノってのを放っておけば、いずれはうちの子供達にも被害がでるんだろ？」

レオン「ああ、世界中に影響はでるだろう」

メラヒ「それなら他人事じゃないからね。これくらい安いもんさ」

そう言うと、ハシゴを昇り潜水艇の外に出る。

マイコ「そんじゃ、出発」

こうして人魚の町、アクマクアへと向かうのであった。

第五話 完

友情と信頼（後書き）

鳴き声は仕様です

騎士の魂（前書き）

一行は、海賊の本拠地ラウミー島を出発して、人魚の町アクマクアへと向かっていた。

騎士の魂

―潜水艇―

潜水艇に乗り込んだ四人は、窓から海中の景色を楽しんでいた。

マリリン「みてみてー、おさかな」

ジーク「お前も魚じゃーん」

マリリン「人魚だよ!」

ジーク「似たようなモノだろうが」

マリリン「ちがうもん!」

レオン「あまりマリリンをイジめるなよ、泣いてしまうぞ」

マリリン「泣かないよ!」

マイコ「そろそろ夜光虫の洞窟に着くっすよ」

ジーク「なんだそりゃ?」

マイコ「人魚の町に続く洞窟っす」

ジーク「ふえ」

しばらく海中を進むと、ぽっかりと口を開けた洞窟が見えてくる。

ジーク「洞窟って、あれか?」

マイコ「そうっす」

マリリン「おねえちゃん、心配してるだろうな」

ジーク「なにっ! お姉さんがいるのか!」

マリリン「うん」

ジーク「是非紹介をだな」

マリリン「いいよ」

ジーク「やったぜ」

マイコ「洞窟に入るっす」

洞窟の中に入ると、淡い緑色の光に包まれた美しい光景が広がっていた。

ジーク「うおー！なんだこりゃー!？」

マイコ「夜光虫、ってのが壁一面に張り付いてて、緑色の光を放ってるっす」

マリン「あの虫まずいよー」

ジーク「お前、虫食ったのかよ・・・」

マリン「えへへ」

レオン「・・・（次のマモノは一体どんな奴なのか・・・）」

リリィ「レオン？どうかなさったの？」

レオン「いやな、景色が綺麗だと思ってな」

リリィ「そうですわね」

マイコ「そろそろ浮上するっすよ」

潜水艇が浮上すると、そこは町の中心と思われる場所だった。

―アクマクア―

マイコ「みなさーん、到着したっす。外には空気があるっすから出て平気っすよ」

レオン「町は海の中にあるんじゃないかったのか？」

マイコ「正確には、海の中からしか行けないって事っすよ」

レオン「なるほどな」

マリリン「レオン、はやくー」

ジーク「はやくー」

レオン「わかったわかった」

マイコ「うちはここで待ってるっす。用事が済んだら戻ってきて欲しいっす」

レオン「ああ、できるだけ早く終わらせる」

四人がハッチを開けて外に出てみると、そこには驚いた人魚達が集まってきていて、

マリリンは彼らを安心させる為に、無事に帰ってきた事を伝える。

マリリン「みんなー！かえってきたよー」

人魚A「あれはマリリンじゃないか！？」

人魚B「無事だったのね」

マリリン「レオン達がねー、助けてくれたの」

人魚A「そうかそうか。皆さん仲間を助けてくれてありがとう」

レオン「礼には及ばん」

マリリン「みんなー、あたしの家にいこうー」

ジーク「お姉さんを安心させてやらないとな」

マリリンに連れられて、家へと向かった。

ーアクマクア マリリン家ー

マリリン「おねえちゃん！かえってきたよー！」

人魚姉「あらあら？マリリンちゃん、どこに遊びに行ってたの？」

マリリン「遊んでたんじゃないよー！」

ジーク「ワーオ！実にお美しいお姉さんだ！」

人魚姉「あら〜？そちらの方達はどなたかしら〜？」

マリン「あたしを助けてくれ人達だよ」

人魚姉「あらあら、そうなの〜？」

レオン「レオンハルトと申します」

リリィ「リリィと申しますわ」

ジーク「俺はジークニール！お姉さんのお名前は？」

人魚姉「私はアクアよ〜。皆、マリンちゃんを助けてくれてありがとう〜」

ジーク「フッフ、それじゃあ私とデートしましょう」

アクア「あらあら〜？私でいいの〜？」

ジーク「もちろんです！！」

レオン「そんな事してる場合じゃないだろう。人魚の姫に会わなければ」

アクア「あら〜？ディーネちゃんに会いたいの〜？」

レオン「ディーネちゃんとは？」

マリン「お姫さまの名前だよ」

レオン「なるほど。ここに来た理由は、ディーネ姫にマモノがとり憑いていないか調べる為です」

アクア「マモノ〜？」

レオン「実はかくしかじかで」

例の如く事情を説明する。

アクア「あらあら、まあまあ、それは大変ね〜」

ジーク「そうなんだよ〜」

レオン「仲間を船で待たせているので、早い所確認したいのだが」

アクア「それじゃ〜、私が会わせてあげるわよ〜」

レオン「それは願っても無い、是非お願いします」

アクア「でもその前に、海王様にご挨拶しないとね」

レオン「海王様とは？」

マリン「海王様はねー、ディーネちゃんのお父さんでねー、海で一番偉い人なんだよ！」

レオン「確かに、ご挨拶するのが礼儀ですね」

アクア「それじゃあ行きましようか」

アクアに案内されてアクマクア王宮へと向かうと、入り口に二人の兵士が立っていて、一行を呼び止める。

人魚兵A「まてまてえーい！怪しい奴らめえーい！」

アクア「あらあら、私よ」

人魚兵A「おおう！アクアさんじゃありませえーんか！」

アクア「この子達は私のお友達なのよ、通してあげてくれないかしら？」

人魚兵A「うむむ、どうするべきか・・・」

アクア「お願いきいてくれたら、うれしいな」

人魚兵A「でへへ。しょうがないな、特別だぞ」

人魚兵B「おいおい、いいのかよ？」

人魚兵A「大丈夫大丈夫、へーきへーき」

アクアの色仕掛けのおかげで通してもらえる事となり、王宮内に入っていく。

―アクマクア王宮―

王宮に入った一行は、会話をしながら王の間へと向かっていた。

レオン「アクアは王宮に仕えているのか？」

アクア「そうよ」

ジーク「だから品が良いんだな、うん」

レオン「お前も城に仕えているはずなのに、こうも違うものか」

ジーク「それはだってあれだよ、男のあれだよ」

レオン「何だそれは」

アクア「海王さまの部屋が見えてきたわよ」

王の間の前にはやはり兵士が立っていた。

人魚兵E「おや？アクアさんじゃないですか」

アクア「警備、ご苦労様」

人魚兵E「いえいえ、これも仕事ですから」

ジーク「ご苦労様です」

人魚兵D「こらこら、勝手に入っちゃいかん」

自然に中に入ろうとするが止められてしまう。

ジーク「惜しかったな」

アクア「その子達を通してあげてくれないかしら？」

人魚兵D「色々と手続きがあつてですね」

人魚兵E「別にいいんじゃないか？」

人魚兵D「お前なあ、そんな簡単に決めれないだろう」

人魚兵E「お前は硬いんだよな、そんなんじゃないぞ？」

人魚兵D「それとこれとは関係ないだろうがー！」

アクア「みんな、入っていいわよ」

レオン「行こうか」

マリン「はい」

人魚兵がモメ始めたので、そつと王の間へと入る。

―アクマクア王宮 王の間―

王の間に入ると、そこには腕が六本、足が二本ある、巨大なハゲたおっさんが玉座に座っていた。

アクア「海王様、お客様を連れてきましたあゝ」

海王「ヌーン？」

ジーク「でっけー、おっさんだな」

レオン「海王様、お初にお目にかかります。私の名はレオンハルト
Ⅱシュタインと申します」

海王「シュタイン・・・？おー、シュタイン家のモノか」

レオン「ご存知なのですか？」

海王「100年前にも、シュタインと名乗るモノが訪ねてきたから
な」

レオン「（もしかして、お爺様か・・・？）」

海王「シュタイン家のモノが来たと言う事は、マモノが復活してし
まったのか？」

レオン「封印を守りきれず、申し訳ありません」

海王「なーに、また封印すりゃ良いだけの事だ」

レオン「恐れ入ります。それで用事と言うのは、デイナー姫にマモ
ノがとり憑いているかもしれません」

海王「やはりそうか」

レオン「やはりというと？」

海王「最近デイナーネの奴がな、一緒に風呂に入ってくれんだ」

ジーク「なんだよそれ・・・」

海王「それだけではない、気にいらない事があると急に怒り出した
りなあ」

レオン「間違いなさそうですね」

海王「早いところ封印してくれると助かるぞ」

レオン「それでは、ディーネ姫に会わせて頂けるでしょうか？」

海王「うむ。部屋にいるだろうから行ってくるといい」

レオン「ありがとうございます」

海王の許可を得たので、姫の部屋に向かう事にし、しばらく廊下を
歩いて部屋の前に着くと、アクアがドアをノックする。

トントントン！

アクア「ディーネちゃん、入るわよ」

すると、中から返事が返ってくる。

ディーネ「アクアか？入ってよいぞ」

アクアを先頭に順番に部屋へと入る。

―アクマクア王宮 姫の部屋―

アクア「ディーネちゃん、お客様を連れてきたわよ」

ディーネ「むむ、だれじゃ？」

レオン「ディーネ姫、お初にお目にかかります」

ディーネ「おぬしら人間か！」

ジーク「おう！人間だ」

ディーネ「人間はきれいじゃ！でていけー！」

ジーク「ええー！？もうちよつと話そうぜ」

ディーネ「いやじゃ！いやじゃ！人間は悪い奴じゃ！」

マリリン「ディーネちゃん！みんないい人達だよ！」

ディーネ「なんじゃマリリン、最近姿が見えなかったではないか？」

マリリン「えつと、漁師の人に捕まっちゃってて」

ディーネ「ほれみろ、やっぱり人間は悪いやつじゃ！」

マリリン「あう」

レオン「ディーネ姫、なぜそこまで人間を嫌っておられるのですか？」

ディーネ「人間には教えぬ！」

マリリン「それじゃあ、あたしに教えてよう」

ディーネ「おぬしなら、まあいいじゃろ、耳を貸すのじゃ」

マリリンにコッソリと理由を教える。

ディーネ「喋ってはならぬぞ」

マリリン「はい」

リリィ「私達にも教えてくださらない？」

ディーネ「いやじゃ」

ジーク「まあまあ、これでも食べてリラックスしようぜ」

一本のバナナを差し出す。

ディーネ「なんじゃこれは？」

マリリン「バナナって言って、すっごい甘くておいしいの」

ディーネ「むう……。どうしても言うのなら、受け取ってやらんでもないぞ」

ジーク「どうぞどうぞ」

ディーネ「うむ。それじゃあ頂くとするかの」

嬉しそうにバナナを食べ始める。

ディーネ「もぐもぐ。こ、これは！とってもおいしいのう〜♪」

バナナを食べて幸せ気分になるディーネ。

すると、胸の辺りに黒い光が表れ、レオンはそれを見逃さなかった。

レオン「ヒソヒソ・・・（心の扉が表れたぞ）」

ジーク「ヒソヒソ・・・（バナナ作戦大成功だな！）」

リリィ「ヒソヒソ・・・（勝手に入ってよろしいのかしら？）」

レオン「ヒソヒソ・・・（海王様には許可を頂いているんだ、問題ないだろう）」

リリィ「ヒソヒソ・・・（そうですわね）」

レオン「ディーネ姫、動かないで下さいね」

ディーネがバナナを食べている隙に、扉に鍵を差し込むと、辺りは光に包まれていく。

ディーネ「な、なんじゃー!？」

―精神世界―

精神世界に侵入した四人の目に映ったのは、溶岩が流れる灼熱の火山地帯だった。

レオン「ここは火山か？」

ジーク「あっちー！」

マリ「焼き魚になっちゃうよ」

リリィ「あら？マリンまで連れてきてしまいましたわね」

マリ「ここどこー？」

レオン「マモノが作った世界だ」

マリ「心の中なの？すごーい」

到着して間もなく、辺りに爆音が響き渡る。

ドッカーン！

ジーク「なななんだ！？」

リリィ「火山が噴火したようですわ！」

レオン「このままだと溶岩に巻き込まれるな」

マリ「みんなー、あっちに洞窟があるよー」

マリ「が遠くに洞窟を発見する。」

レオン「行くぞ！」

四人が慌てて洞窟に駆け込むと、入り口が赤黒い溶岩で覆い尽くされて塞がれてしまう。

ジーク「セーフ」

レオン「しかし、戻れなくなったな」

リリィ「洞窟が奥の方に続いていますわ」

レオン「進むしかないか」

しばらく薄暗い洞窟を進むと、出口が見えてくる。

ジーク「おー、外だ」

レオン「ここは・・・、火山の火口付近のようだな」
マリン「みんなー、あれみてー」

マリンが指差した先には、カメの胴体にゾウの脚と鼻を足したような、奇妙なマモノがいた。

レオン「奴がここのマモノか」

ジーク「ありゃ、怠惰よりでかいぜ」

リリィ「まだこちらには気づいてないようですわね」

レオン「まずは俺とジークで奴の動きを探る。二人は後方で観察してくれ」

リリィ「わかりましたわ」

マリン「はーい」

ジーク「噴火したすぐ後に戦うのかよ」

レオン「落石は避ければ問題ない」

ジーク「無茶言いやがって」

レオン「俺は奴の後ろに回りこむから、お前は正面から注意を引き付けてくれ」

ジーク「オッケー」

作戦会議を済ませると、四人は行動を開始する。

まずはジークがマモノの注意を引き付ける。

ジーク「おーいカメちゃん、遊ぼうぜ」

???「パォーン？ナンダオマエハ？」

ジーク「俺かあ？俺の名はジークニール！人呼んで俊足のラストナイトだあ！」

ジーク「お前も名を名乗れえーい」

???「ワガナハ【フンド】・・・。パオオオオオオン！」

自己紹介が終わると、唐突に鼻から溶岩を噴射してくる。

ジーク「おわっ!？」

とっさに盾を構えて防ぐ。

ジーク「このやろー!いきなり攻撃するなんて卑怯だぞ！」

憤怒「ウルサイゾオオオオオン！」

憤怒は容赦なく溶岩を噴き出し続け、ジークは防ぐので手一杯であった。

ジーク「くっそー、うごけねえ……。ん?あれはレオンか？」

憤怒がジーク相手に夢中になっていると、いつの間にかレオンが憤怒の甲羅の上に乗っていた。

ジーク「(こいつ・・・、弱点が見当たらないぞ・・・?)」

憤怒「ヌヌヌ!?ダレダ!セナカニノツテイルノハ！」

ジーク「気づかれたか！」

憤怒「パオオオオオオオオン!!」

背中に乗っている事がバレると、憤怒は激しく暴れだす。

レオン「(マズい、掴まる場所がない!)」

憤怒「パオオオオオオオン！」

甲羅の上はツルツルしていて掴まる場所など無く、レオンは吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。

ザザザザアアア！

レオン「ぐはあ！」

憤怒「トドメダゾオオオオオン！！」

倒れているレオンを踏み潰そうと、足を大きく上げる。

ジーク「させるかあああ！！」

とっさに走り出すと、勢いよく下ろされる足を盾で受け止める。

憤怒「パオパオパオ、ヨクトメラレタナ」

ジーク「ぬおおお！！」

レオン「げほっ！げほっ！、ジークすまんな・・・」

ジーク「レオン、今の内にここを離れろ！」

レオン「お前を置いて逃げれるわけないだろう」

レオンは立ち上がると、憤怒の懷に潜り込み、下から剣を突き刺す。

レオン「ハアッ！」

ザシュ！

憤怒「イタイゾオオオオウ！！」

あまりの痛みに、足を再び大きく上げる。

レオン「今だ！逃げるぞ！」

ジーク「うえーい」

憤怒が足を下ろす前に、二人はその場から離れる。

ジーク「ヒュー、助かったぜ」

レオン「それはこちらのセリフだ」

憤怒「オマエラ！ユルサンゾォオオオウ！」

憤怒の怒りは激しさを増し、噴き出す溶岩の量が更に増えていた。弱点も見つからず、防戦一方の二人、その頃、後方で観察していたリリイとマリンは……。

リリイ「このままでは二人が危ないですわ」

マリン「どうしょー」

リリイ「わたくしも加勢するべきかしら……」

マリン「あぶないよー」

リリイ「でも……」

マリン「うーん、あたしが歌ってみる！」

リリイ「歌？」

マリン「うん、人魚の歌にはねー、不思議な力があるの」

そう言うと、マリンが唄い始める。

マリン「ラララ〜♪」

ジーク「ん？なんだこの歌？」

レオン「わからん……が、なにか不思議な力を感じる」

憤怒「パオーン？」

憤怒も怒りを忘れ、思わず耳を傾ける。

マリン「ラララ〜……。わかったー！」

唄い終えたマリンが何かに気づき、レオン達に大声で伝える。

マリ「レオン！その亀さんの弱点は頭だよ！」

ジーク「なにー！？」

レオン「頭……。そうか、甲羅の中か！」

ジーク「なるほどな、弱点さえわかればこんな奴相手じゃないぜ！」

憤怒「パオパオパオ！バショガワカツタコロデ、コウゲキデキマ
イ」

レオン「ジーク耳を貸せ……。ごによごによ」

ジーク「おっけー」

レオン「リリィー！ジークにムチを投げろ！」

リリィ「ええ！？」

ジーク「いそげー！」

リリィ「わかりましたわ！」

思い切りムチを投げると、ジークが受け取り装備する。

レオン「行くぞ！」

レオンとジークは左右に分かれ、的を散らした事により、憤怒はどちらを攻撃するか迷う。

憤怒「コザカシイマネヲ……」

ジーク「ヘイヘーイ！こっちに攻撃しな！」

憤怒「ソノテニハノランゾ！」

先程の経験を踏まえて、レオンに狙いを定めて溶岩を噴射する。

レオン「フッ」

ジーク「かかったなー！」

ジークが横から回り込むと、憤怒の鼻にムチを絡めて頭を引きずり

出そうと試みる。

ジーク「ぐおおおおお!!でてこいやああ!!」

憤怒「コザカシイゾオオウ!!」

憤怒はムチを振り解こうと必死に暴れるが、切れる様子も解ける様子もなかった。

憤怒「ナンダコレハ!」

ジーク「このムチはスペシャルなんだぜ!!」

憤怒「クソウ!」

解くのを諦めた憤怒は、ジークめがけて突進を始める。

憤怒「コレデヒッパルコトハデキナイゾウ!」

ジーク「バカバカ!やめろって」

逃げ回るだけで引っ張る事ができず、作戦は失敗かと思われた。

レオン「(どうなるかわからないが、脱力を使ってみるか)」

意識を集中し、憤怒めがけて脱力を放つが、まるで効いている様子はなかった。

レオン「(マモノには通用しないとなると。他にいい手はないものか・・・)」

脱力も通じず途方に暮れるレオン。すると、逃げ回っていたジークがアイデアを閃く。

ジーク「レオン！俺に考えがあるぜ！」

そう言うのと、火口に向かって走っていく。

憤怒「ナニヲスルキダ！」

レオン「まさか！？」

ジーク「レオン、後は任せたぞー！」

火口に到着したジークは、躊躇無く飛び降りる。

憤怒「ヤメロオオオオン！」

しばらくしてムチがピンと張った状態になると、
甲羅から頭がグイグイと引っ張り出され、コアが露出する。

レオン「ジーク！お前の死は無駄にはしないぞー！」

ジーク「おーい！死んでないぞー！」

ジークが命をかけて作り出した隙を無駄にしない為にも、レオンは
コアめがけて全力で走り出す。

一方、憤怒はその場で踏ん張っているのが精一杯で、近づいてくる
レオンに成す術も無かった。

憤怒「マテヤメロ！ハナセバワカル！」

レオン「問答無用！！！」

ズシュ！、パキパキパキパキッ！パリーン！

憤怒「パオオオオオオオン！！！」

剣を突き立てると、コアは粉々に砕け散り、憤怒の体は黒いモノと

なつて剣に吸い込まれていくが、
それと同時に鼻を縛っていたムチが解けてしまう。

レオン「マズい！ムチが！」

とつさに掴もうとするが、あと少しの所で掴む事ができず、もうダメかと思われた、その時。

マリン「うーん！重いよー！」

リリィ「レオーン！早く手伝ってー！」

岩場に隠れていたはずの二人が、いつの間にかムチを掴んでいた。

レオン「二人共、よくやったぞ！」

急いで二人のもとへ向かい、ムチを手に巻きつけると、力一杯引き上げ始める。

レオン「ジーク！大丈夫かー！？」

ジーク「なんとかな」

リリィ「無茶しすぎですわよ」

ジーク「へっへっへ」

レオン「それにしてもお前、重過ぎるぞ」

ジーク「この重さのおかげで倒せたようなもんだぜ」

リリィ「そうですわね」

一同がある事を忘れていると、それは突然やってきた。
ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

マリン「わわわ！」

レオン「いかん！精神世界が崩れ始めた」

ジーク「早く引き上げてくれえ」

レオン「全力でやっている」

ジーク「おい！やばいぞ！火山が噴火しそうだ！」

マリン「えー！？本当に焼き魚になっちゃうよー」

レオン「ジーク！鎧を捨てろ！」

ジーク「いやいや、これは騎士の魂だから」

リリィ「そんな事言っている場合ではありません！」

マリン「そうだよー、このままだとみんな死んじゃうよー」

ジーク「でもなー」

レオン「ジーク、お前のしたかった事はなんだ・・・？」

ジーク「えーっと」

レオン「大切なモノを護る為に騎士になったんだろう・・・？」

ジーク「そうだった」

レオン「鎧なんて無くとも、お前の心の中に騎士の魂はあるはずだろ・・・！？」

ジーク「おっ、そうか」

ジークはレオンとの問答の末に、ラストナイトの境地に辿り着き、思い切って鎧を脱ぎ捨てた。

レオン「よく決断したな・・・」

ジーク「おうよ！」

リリィ「大分軽くなりましたわね」

マリン「これならいけそうだよー！」

三人は精一杯ムチを引っ張り、ようやくジークを引き上げる事に成功する。

ジーク「はぁ、助かった」

レオン「はぁはぁ・・・、早く逃げないとな」

ジーク「マリーン！俺が抱っこしてやるぜえ」

マリン「うん」

レオン「よし、行くぞ！」

四人は休む間もなく、心の扉を目指して走り出すが、洞窟の出口は相変わらず塞がれていた。

ジーク「そいや、溶岩で塞がれてたんだっけか」

リリィ「どうしますの？」

レオン「新たな力を試してみる」

ジーク「おっ？おっ？」

レオンが意識を集中すると、心の剣が輝き始める。

ジーク「なんだなんだ？」

レオン「ハアッ！！」

輝きを纏った剣の一撃は、固まった溶岩の壁を跡形もなく打ち碎いた。

ドッカーン！

ジーク「ヒュー」

レオン「さあ行くぞ！」

洞窟を抜ける事ができた四人は、無事に現実世界へと帰還する。

―アクマクア王宮 姫の部屋―

レオン「ふう・・・、戻れたか」

ディーネ「おまえたち！なにをしたのじゃ！」

レオン「ディーネ姫、今のは心を癒す魔法ですよ」

ディーネ「魔法？」

レオン「はい、ご気分が良くなったものではありませんか？」

ディーネ「うゝむ。言われてみれば、なんだか清々しい気分なのじゃ♪」

ジーク「ヒソヒソ・・・（姫様は俺たちが消えた事に気がついてないのか？）」

レオン「ヒソヒソ・・・（恐らくだが、精神世界にいる間は時間が進まないのだろう）」

ジーク「ヒソヒソ・・・（だから怠惰の時もおっさんが目を瞑ってたのか）」

レオン「ヒソヒソ・・・（そういう事だ）」

ディーネ「なにをヒソヒソ言っておるのじゃ？」

ジーク「いや、そろそろ帰ろうかと」

レオン「マイコが待っているしな」

ディーネ「そうか、またな。バナナおいしかったぞ」

ジーク「またバナナ持ってきてやるよー」

レオン「アクアさん、帰りもお願いします」

アクア「はい」

五人はディーネと別れて部屋を出る。

―アクマクア王宮―

しばらく廊下を歩いていると、唐突にレオンが口を開く。

レオン「マリン、さっき姫から教えてもらった理由を聞かせてくれないか？」

マリン「いいよー。えっとねー、人間が海を汚したり、人魚にひどい事するのが許せないんだってー」

レオン「そうか……。みんな、先に王の間に行っていてくれ」

そう言うのと、姫の部屋に引き返し、部屋の前に到着するとドアをノックする。

トントントン！

レオン「姫様、入ってもよろしいですか？」

すると、中から返事が返ってくる。

ディーネ「ダメじゃ」

レオン「それならば、ここで話しますので聞いてください」

部屋からは何も反応が返ってこない。

レオン「姫様がなぜ人間を嫌っているのか、その理由を先程知りました」

レオン「人間が犯した罪は決して許される事ではないでしょう……。ですが、一度だけ私にチャンスを下さい」

レオン「今している旅を終わらせた暁には、人魚と美しい海を守る

為に尽力する事を誓います・・・」

やはり何も反応は無い。

レオン「私からの話は以上です。失礼しました」

その場を離れようとする、ドアがゆっくりと開いてディーネが少し顔を出すと、小さな声で喋りかける。

ギー・・・

ディーネ「人間は嫌いじゃ。嫌いじゃが、お前を少しだけ信用してやる」

ディーネ「わらわが女王になるまでに、人間達の行いが改善されぬようなら・・・、その時は覚悟しておれよ？」

その言葉を聞いたレオンは、そっと振り返り一言だけ述べる。

レオン「ありがとう」

そう言うと、仲間達が待つ王の間へと向かう。

―アクマクア王宮 王の間―

レオン「みんな、待たせたな」

リリィ「何をしてらしたの？」

レオン「秘密だ」

海王「封印の方はどうであった？」

レオン「無事に憤怒を封印する事ができました」

海王「ハッハッハ！よくやった。この調子で他のマモノも頼んだぞ」
レオン「はい！」

アクア「それじゃあ、そろそろ失礼しましょうか」

ジーク「マイコが待ちくたびれてそうだぜ」

レオン「それでは海王様、お世話になりました」

海王「うむ。困った事があれば相談しにきなさい」

海王に挨拶を済ませ、マイコの待つ潜水艇へと向かう。

――潜水艇――

レオン「マイコ、待たせたな」

マイコ「用事が終わったっすか？」

ジーク「おう、バッチリ」

マイコ「それじゃ発進するっすよ」

レオン「アクアさん、お世話になりました」

アクア「みんな、また遊びにきてねえ」

マリリン「あたしも行きたいよ」

レオン「お前は子供だからダメだ」

マリリン「けちー！」

ジーク「アクアさん！次こそはデートしましょうね！」

アクア「うふふ、そうね」

ジーク「ああ、別れたくない・・・」

リリィ「それじゃ閉めますわよ」

マリリンとアクアに別れを告げ、ハッチを閉めて潜水を開始する。

マイコ「それでえー、次はどこに向かうっすか？」

レオン「そういえば次の行き先を決めてなかったな」

マイコ「特に行き先がないならー、ナンバなんてどうっすか？」

レオン「ナンバ？」

マイコ「芸人の町でー、ここからかなり近い所にあるっす」

レオン「では、お願いしよう」

ジーク「これで行き先は決まったな」

マイコ「そんじゃ向かうっすね」

こうしてアクマクアで憤怒を倒した一行は芸人の町、ナンバに向かうのであった

第六話 完

騎士の魂（後書き）

今回手に入れた新たな得意技

技名…集気

効果…チャージ量に比例して、剣の威力を上げる

発動条件…静止している事、精神集中できる環境である事

坂本新喜劇（前書き）

アクマクアで憤怒を倒した一行は、新たなマモノの情報を手に入れるべく、芸人の町【ナンバ】へと向かっていた。

坂本新喜劇

―潜水艇―

ジーク「なあなあレオン」

レオン「なんだ？」

ジーク「あのピカピカ！ってなってドカーン！ってなる技に名前つけようぜ」

レオン「憤怒の技だな。【集気】とでも呼ぼうか」

ジーク「イマイチ」

リリィ「なんだかマリンがいないと寂しいですわね」

レオン「からかうと面白かったな」

ジーク「そうだなあ、紅一点と言っても過言ではなかったからな」

リリィ「それはどういう意味ですか？」

ジーク「レオン、リリィがこわいよ」

レオン「知るか」

マイコ「みなさん、そろそろナンバなんすけど」

レオン「どうかしたのか？」

マイコ「町に港が無いんで、近くの海岸でいいですか？」

レオン「ああ、構わん」

マイコ「そんじゃ、横付けするっす」

潜水艇が海岸に横付けされると、ハッチを開けて上陸する三人。

マイコ「それじゃ、うちは帰るっす」

レオン「世話になったな」

ジーク「またな」

マイコ「なんか困った事があれば、また会いに来るといいですよ」

マイコに別れを告げると、潜水艇は再び海の中へと消えていく。

ジーク「そんじゃ、町にいくか」

レオン「そうだな」

マリリン「れつつごと」

ジーク「ん？」

聞き慣れた声がしたので振り返ってみると、ビシヨビシヨに濡れているマリリンが立っていた。

ジーク「なにやってんだお前？」

マリリン「あたしもついてくー」

レオン「ダメだ、帰れ」

マリリン「やだー！」

レオン「お姉さんに許可は貰ったのか？」

マリリン「うん！」

ジーク「許しも出てるみたいだし、連れてってやろうぜ？」

レオン「まだ子供なんだぞ？」

ジーク「わかってるって。だけどよ、マリリンの歌は戦力になるぞ？」

レオン「しかしだな」

マリリン「いい子にするから」

ジーク「面倒みるから」

レオン「ふう……。ジーク、お前がちゃんと護ってやれよ？」

ジーク「おうよ」

マリリン「やったー！」

リリィ「良かったですわね」

レオン「それじゃあ、町に向かうとするか」

再びマリンを仲間に加えて、ナンバに向かうのであった。

―ナンバ―

しばらく海沿いの道を歩き、ようやくナンバに辿り着くと、町には人々の賑やかな声が飛び交っている。

町人A「つつたかたー！つつたかたー！」

ジーク「随分と賑やかだな」

マリン「おまつり？」

「???」「その兄ちゃん達」

町に入ると、キラキラと輝く黄色い派手な衣装に身を包んだ、小さいおっちゃんの話しかけてくる。

ジーク「おっさん、なんかようか？」

おっちゃん「自分ら、旅人やろ？」

ジーク「おう」

おっちゃん「せやろ？そこでや、わいがこの町案内したるわ」

レオン「いや、結構だ」

おっちゃん「なにを遠慮しとんねん。困った時はお互い様やろ？」

レオン「別に困ってはいないのだが」

おっちゃん「ええからええから」

レオン「ちよっと仲間と相談させてくれ」

おっちゃん「はよきめなアカンで」

四人は少し離れた場所で相談をする。

レオン「さて、どうする？」

ジーク「町に詳しそうだし、案内してもらおうぜ」

リリィ「いきなり知らない人について行くのは危険じゃなくて？」

レオン「ふむ。どちらの言い分も一理あるな・・・」

ジーク「それじゃあ、ここは多数決で決めるとしようぜ！

レオン「そうだな、案内に賛成なモノは？」

ジーク&マリィ「はい」

レオン「決まったな」

リリィ「もう、どうなっても知りませんよ」

ジーク「大丈夫だって、あのおっさんは悪い奴じゃない！俺の勘がそう告げる！」

レオン「わかったわかった」

意見がまとまったので、おっちゃんの所に戻る。

ジーク「おっさーん！」

おっちゃん「おっ？話がまとまったようやな」

レオン「ああ、町案内を頼む」

おっちゃん「よっしゃ！まかせとき！」

こうして、おっちゃんに町案内をして貰う事となり、最初に案内されたのはナンバ名物のとらやき屋。

おっちゃん「ナンバゆうたら、この店のとらやきや。これ食べな帰れへんで」

ジーク「とらやきってなんだ？」

おっちゃん「なんや、とらやきも知らんのか？まあええ教えたるわ。とらやきっちゅうのはやな、中に黒あんとクリームが入っとる菓子や」

ジーク「ひゃー！うまそうー」

おっちゃん「君、ええリアクションするやないか。気に入ったからおごったるわ」

ジーク「マジでー!？」

おっちゃん「お婆ちゃん、とらやき4つ」

お婆ちゃん「まいど、おおきに」

太っ腹なおっちゃんから、とらやきをごちそうになり、食べながら町を練り歩く。

ジーク「こりゃ、うまいなあ」

おっちゃん「ワハハハ!せやろせやろ」

レオン「(美味いが、口の中の水分が全部持っていられる)」

レオンがとらやきを食べながら歩いていると、建物の死角から少年が飛び出してきて激しく衝突する。

レオン「ぐはあ」

少年「いってー!」

ジーク「おいおい、大丈夫か？」

少年「おっさん、どこ見て歩いてんだよ!」

レオン「おっさん・・・」

おっちゃん「こら坊主!兄さんに謝らんかい!」

少年「うるせー!バーカ」

少年は暴言を吐きながら走って逃げていく。

ジーク「全く、教育がなってないな」

おっちゃん「君も災難やったな」

レオン「今に始まった事じゃ・・・、あつ!」

起き上がり服をパタパタとはたいていっていると、何かに気づいた様に大声を発する。

リリィ「どうかなさいましたの？」

レオン「剣がない・・・」

ジーク「なにー!？」

マリィ「どこかに落としたの？」

レオン「いや、盗まれたようだ。剣を結んでいた紐が切られている」

ジーク「さっきぶつかった小僧の仕業か？」

レオン「恐らくはな」

おっちゃん「その剣は大事なもんなんか？」

レオン「我が家の家宝だ」

おっちゃん「そら、大変やないか！」

レオン「うむ。しかし、今から追いかけても見つからないだろう」

おっちゃん「そうやなあ・・・、わいの仲間聞いてみよか」

レオン「仲間？」

おっちゃん「この町では名のある芸人達や。はよいくで」

おっちゃんが四人を引き連れて歩き出すと、きゃべつの形をした建物の前に到着する。

レオン「ここは？」

おっちゃん「ここはな【グランドきゃべつ】いうてな、色々な劇をやっとなねん」

ジーク「ふえー」

おっちゃん「はよ入るで」

そう言うのと、建物の入り口とは別の方向に向かって歩き出す。

ジーク「おいおい、入り口はこっちだろ？」

おっちゃん「そこはお客さん用の出入り口や、わいらは従業員用の裏口からや」

ジーク「なーるほど」

五人は裏口からグランドきやべつに入っていく。

―グランドきやべつ 従業員用通路―

おっちゃん「この時間帯はみんな楽屋におるはずや」

レオン「おっさんは何者なんだ？」

おっちゃん「そろそろ教えたつてもええか。わいは坂本新喜劇っちゆう、劇団の座長やつとるもんですわ」

ジーク「それじゃ、おっさんじゃなくてもっさんだな」

もっさん「けったいな呼び名やな。まあ、好きに呼ぶとええ」

そんな話をしていると楽屋前に到着する。

もっさん「ここやここや。ほな入るで」

もっさんがドアを開けて部屋に入ると、中には変な格好をした人達がいた。

―グランドきやべつ 楽屋―

もっさん「おまえら、お客さんや。挨拶せえ」

仲間達に声をかけるとそれぞれが自己紹介を始める。

アホそうな男「どうも、僕はサカタ言います」

ハゲた男「わしはジョージや！」

美女「うちはミラ言います、よろしゅう」

彼女は赤髪ポニーテールに黒い瞳を持ち。身長176cm。体は細いが筋肉で引き締まっている。

服装はというと、スタイリッシュな着物を身に纏い、手には扇子持つ。

一つだけ気になるのはそれらとは不釣り合いな帽子を被っているという事。

出っ歯の男「俺はアカシヤゆうねんけど、君らだれ？」

レオン「私はレオンハルト」

リリイ「リリイと申しますわ」

ジーク「おれはジークニール」

マリン「マリンだよー」

アカシヤ「そかそか」

もっさん「突然やけどおまえら、盗っ人の子供についてなんか知らんか？」

アカシヤ「はあ？盗っ人でっか？」

もっさん「せや。実はレオン君がな、大切な家宝を盗まれてしまうたんや」

ジョージ「そりゃ大変やがな！」

もっさん「せやろ？だから知っとる事があれば、おしえたらんかい！」

アカシヤ「せやなあ……。最近、町で暴力事件が起きてるらしいですわ」

もっさん「ええ情報持つとるやないか」

アカシヤ「その犯人つてのがまた、えらい悪いやつで」

もっさん「ほう、ゆうてみい」

アカシヤ「なんでも、ハゲてて体がでかいクマみたいな奴らしいですわ」

ジョージ「それわしやないか！」

アカシヤ「ハハハハ！！ッアー！！」

もっさん「ミラちゃんはどうないや？」

ミラ「わかりまへんなあ」

もっさん「サカタ、おまえは？」

サカタ「なにがや？」

もっさん「なにがやあらへんがな、盗っ人の事を知っとるのか、って聞いたんねん」

サカタ「あつ、ぬすつとな！」

もっさん「なんか知っとるような、教えたれや」

サカタ「わからん」

もっさん「は？」

サカタ「忘れてしもた」

もっさん「ほんまアホやなお前は。ジョージはどうや？」

ジョージ「しらんしらん、なーんも知らん」

アカシヤ「でたっ！知らん知らんオバケや！」

ジョージ「しらんしらん、うらめしらん、ってなにやらせとんねん！！！」

手に持っていた灰皿でアカシヤの頭を叩くと、“カンッ”という軽い音が響き渡る。

アカシヤ「いったいわー」

もっさん「すまんなあ、こいつら全然役にたたへんわ」

レオン「いえ、気持ちだけで十分ですよ」

もっさん「いや！このままじゃわいの気がおさまらへん」

ジョージ「座長、こういうのはどや？」

もっさん「なんや？ゆうてみい」

ジョージ「この後の劇が終わったら、集まった客に聞いてみるんや」

もっさん「おまえ、なかなかやるやんけ」

ジョージ「ドヤア！！」

もっさん「そういう事やから、自分らはここで待つとき」

レオン「わかりました。お願いします」

もっさん「おまえら、はよいくで」

新喜劇のメンバーが次々と部屋を出て行くが、ミラだけがその場に
残る。

リリイ「あら？ミラさんは行きませんか？」

ミラ「自分らに話があんねんけど、ちょっと来てくれる？」

レオン「わかりました」

ミラに連れられて部屋を出ると、人気のない倉庫に案内される。

ーグランドきやべつ 倉庫ー

ミラ「ここなら誰にも聞かれへんやろ」

レオン「それで、話とは？」

ミラ「さっきは皆の前だったから知らん言うたけどな、実は心当た

りがあんねん」

レオン「聞かせて頂こう」

ミラ「誰にも口外せんと、約束できる？」

レオン「約束しよう」

ミラ「ほんなら、特別に教えたるけどな。タタルの仕業やと思うねん」

ジーク「あの小僧はタタルって言うのか」

ミラ「せや。今までにも色々なモノを盗んでんねんけど、うちが怒ればちゃんと持ち主に返してたんや」

リリィ「根は悪い子ではないのかも知れせんわね」

ミラ「せやけど。最近のうちがゆうても、全然返そうとせんのや」

レオン「最近ですか・・・。それはマモノの仕業かもしれません」

ミラ「どうゆうことや？」

レオン「かくかくしかじかで」

例の如く事情を説明する。

ミラ「ほんなら、最近のタタルの行動とも辻褄が合うわけやな」

レオン「そういう事です。後は剣が取り戻せれば・・・」

ミラ「そんなん、うちに任せとき！力づくでも取り返したるさかい」

レオン「それはありがたいが、居場所を知っているのか？」

ミラ「あの子は今頃ニャンプーの自宅で寝とるはずやで」

ジーク「ニャンプーってなんだ？」

ミラ「獣人の町や」

ジーク「獣人か、これは厄介だな」

マリリン「なんでー？」

ジーク「むか〜しむかしのお話だが、人間と獣人は戦争してるんだよ」

マリリン「へえー」

ミラ「せやけど、最近は人間と交流する獣人も増えとるんやで。う

ちもその中の一人や」

そう良いながら被っていた帽子を脱いでみせる。

マリリン「あー！ねこみみー！」

レオン「貴方も獣人でしたか」

ミラ「せや。人間相手に商売しとるから、普段は隠してんねんけどな」

ジーク「もっさん達は知ってるのか？」

ミラ「もちろんや」

レオン「犯人が分かった所で、早速ニャンプーへ行くでしょう」

ミラ「まちいな。いきなり自分らが行っても、力づくで追い出されるだけやで」

ジーク「じゃあどうすんだ？」

ミラ「うちが町に行って村長に話つけてきたる」

レオン「ふーむ。お願いします」

ミラ「素直な事はええことやで。ほな、うちはすぐに向かうさかい、自分らは楽屋にもどっときや」

ジーク「おう、頼んだぜ！」

こうしてミラはニャンプーへと向かい、四人は楽屋へと戻る。

ーグランドきゃべつ 楽屋ー

ジーク「もっさん達は、まだ戻って来てないみたいだな」
レオン「座って待たせてもらおう」

待つこと数十分。新喜劇メンバーがガヤガヤと楽しそうに楽屋へと戻ってくる。

もっさん「いやー、今日もめっちゃウケたな」

ジョージ「ワシの渾身のギャグが効いたんでっしやる」

アカシヤ「ないない」

サカタ「僕つかれましたわ」

アカシヤ「サカタ兄さん、隅に立ってただけですやん」

ジーク「もっさん、おつかれさん」

もっさん「おう、待たせたな」

ジーク「なんか良かった？」

もっさん「すまんなあ、全然アカンかったわ」

ジーク「良いつて良いつて」

もっさん「このままじゃ、わいの気がおさまらん！」

ジーク「もっさんも熱い人だな」

ジョージ「ガハハハ！ワシら、兄さんの男気に惹かれて入団したよ
うなもんやからな！」

アカシヤ「俺は金やけどな」

もっさん「せや、自分ら腹減ったやろ？」

ジーク「おうよ！」

もっさん「ほな、皆でメシ食いにいこか」

ジーク「いよっ、太っ腹」

もっさん「自分らなに食べたい？」

アカシヤ「寿司」

もっさん「お前には聞いとらんわ」

ジーク「うーぬ、折角だし名物が食べたいな」

もっさん「よっしや！ナンバ名物、ヤマダのお好み焼きやな」

ジーク「なんかわからんがすごそうだ」

もっさん「そうと決まったら、はよいくで」

もっさんの奢りでごはんを食べに行く事となった。

―ヤマダ本店―

ヤマダの店内に入ると、店員が出迎えて席に案内される。

店員「ごゆっくり」

もっさん「好きなもん選んでええぞ」

アカシヤ「そんじゃ、人魚焼きにしようかな」

マリリン「ええー！」

もっさん「安心せえ、アカシヤお得意のホラや」

アカシヤ「しょうゆうこと」

マリリン「なんだ」

もっさん「おまえらもはよ決めや」

ジョージ「ワシはチャーハンと塩らーめんとビール」

アカシヤ「おれはどうしよかな、特上寿司でええか。後ビール」

サカタ「僕、お茶漬け」

ジーク「どうしよっかな」

レオン「俺は決まった」

ジーク「はえーよ！」

リリィ「わたくしは、レオンと同じモノにしますわ♪」

レオン「ざるそばだぞ？」

リリイ「構いません」

マリリン「あたしはイチゴパフェ！」

ジーク「マリリンにはピッタリだな」

もっさん「そろそろ店員さん呼ぶで」

ジーク「よし！もっさんに任せる！」

もっさん「よっしゃ。店員さん！」

大声で店員を呼んで注文を伝えると、数分後には料理が運ばれテーブルに並べられた。

もっさん「よっしゃ食べよか」

アカシヤ「寿司、美味いわ」

ジヨージ「ガハハハ！ええ気分や」

アカシヤ「ジヨージ兄さんもう酔うてますやん」

ジヨージ「お前も飲めや！」

アカシヤ「ゴボゴボッ！アホか殺す気か！」

ジーク「もっさん、これどうやって作るんだ？」

もっさん「なんや焼き方しらんのか？しゃーない、わいが直々に見せたるわ」

ジヨージ「坊主、サカモト兄さんに焼いて貰えるなんて滅多にないで？」

ジーク「あざーっす」

レオン&リリイ「ずるずるうう」

マリリン「ねーねー、おそばっておいしいの？」

レオン「食べてみるか？」

マリリン「うん！」

レオン「ほら」

ざるそばを小皿に分けてあげる。

マリン「ずるうううううう。おいしーけど、食べるのがむずかしいよ」

レオン「一気に吸うからだ。キリの良い所で噛み切りなさい」

もっさん「ほれ、焼けたで」

ジーク「いただきやーす！」

ジョージ「うまそうやな、ワシもいただくでえ」

ジーク「アチチ！アツツ！ホッホッホッ！」

ジョージ「だらしのないのう、通は一口で食べんねや！」

ジーク「いやいや無理だって」

アカシヤ「兄さん、男を見せたってくださいよ」

ジョージ「やったらあー！！！」

アツアツのお好み焼きを、口いっぱい頬張るジョージ。

ジョージ「あっちゃあいいー！！！」

あまりの熱さに悶絶するジョージ。

アカシヤ「ハハハハ！ツアー！！！」

もっさん「おまえら、悪ふざけもええ加減にせえよ」

サカタ「静かに食べようや」

ジョージ「すんまへーん」

そんなこんなで、賑やかに食事をしていると、ニャンプーへ行っていたミラが入店してきて、一同のもとへと歩いてくる。

ミラ「みんな、こんな所におったんか」

もっさん「ミラちゃん、舞台放っておいて何処いっとったんや？」
ミラ「すんまへんなあ、レオン君の剣を取り戻しに行ってたんですわ」

もっさん「そら、しゃーないな」

レオン「剣は取り戻せましたか？」

ミラ「ごめん、アカンかったわ」

レオン「そうですか……。村長の方は？」

ミラ「うちが同伴ならええって」

レオン「では、ニャンプーへの同行をお願いしたい」

ミラ「もちろん、そのつもりやで」

ジーク「この町には良い人しかいないのかよ」

もっさん「ワハハハ！せやせや」

ジョージ「ミラァー！お前も飲めや」

ミラ「ほんなら、いただきます」

ミラを交えての食事は賑やかに進み、気がつけば店の閉店時間を過ぎていた。

店員「お客さん、そろそろ帰ってくださいよ」

もっさん「いやー、すまんすまん。おまえら帰るで」

ジョージ「ぐごー、ぐごー」

アカシヤ「・・・」

マリリン「すやすや」

サカタ「三人共寝とりますわ」

もっさん「ジョージ、アカシヤ、はよ起きんかい」

ジョージ「頭痛いわ」

アカシヤ「朝でっか・・・？」

もっさん「ホンマしょーもない奴らやな。君達もこんな時間まで付き合わせてしもうて悪いなあ」

ジーク「さすがに眠いぜ」

もっさん「せや、自分ら宿決まってるやろ？」

ジーク「そりやもう全く」

もっさん「ほんなら、今日はうちの劇団の宿舎に泊まってくとええわ」

レオン「よろしいのですか？」

もっさん「かまへんかまへん。ミラちゃん、送ったってあげてくれるか？」

ミラ「ほなら、みんないこか」

ジーク「よいしょ、っと」

ジークが寝ているマリンを背負い、ミラに案内されて坂本新喜劇が使用している宿舎へと向かう。

―宿舎 空き部屋―

部屋の中に入ると、六畳程の部屋に四枚布団が用意されていた。

ミラ「狭い所やけど、堪忍な」

ジーク「タダで泊まれるだけで十分だぜ」

ミラ「そうゆうてくれると助かるわ。布団は自由に使ってええよ」

ジーク「おっけー」

ミラ「ほなら、おやすみ」

リリィ「おやすみなさい」

ミラが部屋を出てドアを閉めると、レオンとリリィが布団を敷き始める。

レオン「四人一緒の部屋で寝るのは始めてだな」

リリィ「なんだかワクワクしますわね」

ジーク「とりあえず、マリンを寝かせないと」

しばらく待っていると布団の用意ができたので、マリンをそつと寝かせてようやく一息つく。

ジーク「だぁー。マリンは小さい割に重いんだよな」

レオン「下半身は筋肉質だからな」

ジーク「もう俺は寝るぞー」

レオン「俺も寝るよ」

リリィ「おやすみなさい」

ジーク「ぐがーぐがー」

左からレオン、ジーク、マリン、リリィの順に並んで就寝する。そして翌朝。レオンの体に何かがのしかかり、その重さで目が覚める。

レオン「(んゝ・・・、重い・・・)」

ジーク「ぐがーぐがー」

どうやらジークが足を乗せていたようで、起こさないようにそつと足をどけると、外の空気を吸いに部屋を後にする。

レオン「すうー、はぁゝ・・・。ん？あれはミラか？」

外に出て深呼吸をしていると、ふと、ミラの姿が目飛び込んでくる。

レオン「(あれは・・・、コロモがやっていた舞というヤツか?)」

舞を演るミラの姿は女神の様に美しく、思わず見惚れてしまう。

レオン「・・・」

ジーク マリン「ワッ!!」

レオン「ぬわっ!？」

舞に夢中になっていたので、背後から忍び寄ってきていた二人の気配に気づかず、突然発せられた大声に普段はクールなレオンも思わず声を上げてしまった。

ジーク「ハハハ!」

マリン「あはは」

レオン「脅かすなよ・・・」

ジーク「日頃のお返しだぜ」

そのバカ騒ぎに気づいたミラは舞を止め、三人に声を掛ける。

ミラ「みんなおはよう、朝から元気やね」

ジーク「元気も元気、元気ビンビン丸だぜ!」

レオン「なんだそれは」

マリン「ミラさん、なにしてたの?」

ミラ「うちは舞の稽古や」

ジーク「最高にクールだったぜ」

ミラ「ふふっ、おおきに」

そんな話をしていると、今の騒ぎで目が覚めてしまったのか、リリイがぼさぼさの髪で部屋から出てくる。

リリイ「おはようございます」

ジーク「おっす」

マリン「おはよー」

レオン「リリイ、髪型がなんというか、芸術的だぞ」

リリイ「えっ？」

何の事かわからず髪を手で触って確かめると、ようやく事の重大さに気が付いたようで慌てて部屋に戻っていく。

リリイ「見ないでー！」

ギィー！ガチャン！

ジーク「もう遅いつての」

マリン「どっかーんってなつてたね」

ミラ「皆起きたようやし、そろそろいこか？」

ジーク「その前に、もっさんに挨拶してかないとな」

レオン「そうだな」

ミラ「ほな、うちはリリイちゃんを待ってから出口に向かうさかい、三人で挨拶に行つとき」

ジーク「もっさんはどこにいんだ？」

ミラ「せやね……。多分、新喜劇の楽屋におるよ」

ジーク「オーライ、行こうぜ」

ミラと別れ、もっさんのいる新喜劇楽屋へと向かった。

ーグランドきゃべつ 楽屋ー

楽屋前に到着すると、ドアをノックして中へと入る。
トントン！

ジーク「失礼しやーす」

中に入ってみるともっさんしかおらず、椅子に座って暇そうにしていた。

ジーク「おはようっす」

もっさん「おっ？おはようさん。ここに来たっちゅうことはなんか用か？」

レオン「これから町を出るので一言ご挨拶をと思ひまして」

もっさん「ワハハハ！感心やな、自分出世するで」

レオン「（一応王子なんだが）」

ジーク「もっさん世話になったな！」

もっさん「おう！また遊びにこいや」

マリン「またねー」

もっさんに挨拶を済ませると、町の出口へと向かい、到着するとそこには既にミラとリリーの姿があった。

レオン「待たせたな」

ミラ「うちらも今来たところやで」

ジーク「そんじゃ出発しようぜ！」

レオン「そうだな」

一同はニャンプーへ向かい歩き出すが、リリーだけがその場に佇んでいた。

レオン「リリー、どうしたんだ？」

リリー「・・・」

ジーク「これは・・・、事件だ！」

普段なら絶対に無視するはずのないリリィ。
これは明らかに様子がおかしかった。

レオン「ヒソヒソ・・・（あの髪型を見られたのが、相当ショックだったのかもしれないな）」

ジーク「ヒソヒソ・・・（意外と繊細なんだな意外と）」

マリン「ヒソヒソ・・・（元氣付けてあげようよ!）」

レオン「ヒソヒソ・・・（そうだな・・・よし!）」

レオンは何かを閃いた様子でリリィに向かいこう述べた。

レオン「お前はすごくかわいい」

突然の言葉に驚愕する一同。

リリィ「えっ？」

ミラ「あらま」

ジーク「ん？ん？」

マリン「わー」

その言葉を聞いたリリィは一瞬驚いた様子だったが、段々と状況を理解して笑い始める。

リリィ「あははは」

レオン「何か変な事言ったか？」

リリィ「みんな勘違いしてますわよ」

ジーク「どういうこった？」

リリィ「わたくしがボートとしていたのは、考え事をしていただけです」

レオン「そうだったのか・・・」

リリィ「でも、レオンからあんなセリフが聞けるなんて感激ですわ」
♪

ジーク「相当レアだからな」
レオン「さっさと行くぞ」

こうしてナンバを出発した一行は、マモノにとり憑かれたと思われる少年【タタル】を助けるべく、獣人の芸子【ミラ】と共にニャンプーへと向かうのであった。

第七話 完

良い嘘と悪い嘘（前書き）

ナンバを出発した一行は獣人の町ニャンプーへと向かう為、街道を歩いていた。

良い嘘と悪い嘘

―街道―

ジーク「このまま街道を歩けばニャンプーか？」

ミラ「ちゃうちゃう、あっちゃや」

そう言って指差した先には森が広がっていた。

レオン「森の中に村があるのか？」

ミラ「せや、人間を怖がって隠れとんねん」

ジーク「ふえゝ、行こうぜ」

街道を外れて薄暗い森の中へと入っていく。

―動物の森―

ジーク「こんな森が残ってるとはなゝ」

ミラ「ここは動物の森ゆうて、住む場所を失った動物が最後に訪れる森や」

レオン「こういった場所は守っていかなければいけないな」

ミラ「ええことゆうやんかゝ」

ジーク「ほとんどの森は戦争で焼けちまったしな」

数分後。

ジーク「町はまだなのか？」

ミラ「もうすぐやで」

マリン「ねーねー」

レオン「どうした？」

マリン「さっきから誰かついて来てるよ」

一同が耳を澄ませてみると、確かに近くの茂みの中からカサカサと音がしている。

ジーク「クマじゃねえの？」

レオン「油断するなよ」

ミラ「この臭い・・・、タタルやな！」

ミラがそう言い放った途端、茂みの中から一本のナイフが飛び出し、すぐさま反応したレオンがリリィ庇う。すると～ドスッ～という鈍い音と共にバランスを崩して膝をつく。

レオン「ぐっ・・・！」

リリィ「レオン！」

ジーク「おい！大丈夫かよ！？」

レオン「急所には入っていない・・・、平気だ」

ナイフは左肩甲骨の辺りに刺さっており、幸いにも致命傷は間逃れる事ができたが、早く治療しなければならぬ状況に変わりはない。あった。

リリィ「レオン・・・、ごめんなさい」

レオン「フッ、お前が気にする必要はない」

ジーク「そんな状態で格好つけんなよ」

ミラ「せやで、はよ町で治療せんと」

思わぬ怪我を負ってしまうが、自力で立ち上がるとふらふらとした足取りで歩き始める。

ーニャンプーー

森の中を数十分歩いてようやく町に到着すると、真っ先にミラが大声で助けを呼ぶ。

ミラ「おーい！仲間が怪我しとんねや、誰か先生呼んでくれへんか！？」

その声に反応した獣人達が集まってくる。

獣人A「ミラじゃないか、仲間って人間か？」

ミラ「せや、治療したってーな」

獣人B「うゝむ、どうしたものか」

ミラ「人の命がかかってんねんで！」

獣人A「しかし村長になんて言われるか」

あまりにもぐだぐだと女々しい事を言う男達に、ミラ姐さんの怒りが爆発する。

ミラ「じゃかわしやボケが！！はよ呼べゆうとんねん、しばくぞワレ！！」

あまりの迫力にその場にいた全員が言葉を失っていると、怒鳴り声を聞いた村長が慌ててやってくる。

村長「ミラか、何かと思ったぞい」

ミラ「仲間が怪我しとんねん」

村長「それは大変じゃな、わしの家に運びなさい」

獣人A「村長！人間を町に入れていいんですか！？」

村長「かまわん。お前は先生を呼んできない」

獣人A「・・・わかりました、すぐに呼んできます」

治療をする為に村長の家へと向かった。

―村長の家―

村長「座りなされ」

家に着くとレオンは倒れるようにして椅子に寄りかかる。

レオン「ふう・・・」

リリィ「顔色が悪くなってきましたわ」

ジーク「早く血を止めねえと」

村長「一体何があったんじゃ？」

ミラ「刺さってるナイフをよう見てみい」

村長「んん？これはタタルのナイフか！？」

ミラ「せや、臭いも確認したし、本人で間違い無いわ」

村長「お前から話は聞いていたが、ここまで深刻な事態になるとは
のう」

ミラ「うちはタタルを探しに行くさかい、後の事は村長に任せるで」

ミラが家を出るのと入れ替わりに、一人の白衣を着たネコが入って

くる、

白衣猫「ここに患者がいるらしいにゃ？」

村長「猫三郎先生、お忙しい所どうもですじゃ。怪我人はその金髪青年ですぞ」

どうやら白衣を着たネコは【猫三郎】と言う医師のようで、レオンに近づいて怪我の様子をじっくり観察すると徐にナイフを引き抜く。すぐさま持っていた箱から薬を取り出し、傷口に塗って出血を止めると、その上から葉っぱの様なモノを”ペタリ”と貼り付けて治療を終えた。

猫三郎「治療は完璧だにゃ」

ジーク「えらく簡単だな」

猫三郎「貴重な薬草を使ってあげたから感謝するのにゃ」

レオン「ありがとう」

猫三郎「素直でよろしいのにゃ。しばらくは彼に無理させたらダメにゃ」

リリィ「先生、ありがとうございました」

猫三郎「それではボクは失礼するのにゃ」

完璧な治療を施した猫三郎先生は家を出て行く。

ジーク「一時はどうなる事かと思ったぜ」

レオン「大丈夫だ、すぐにでも動ける」

ジーク「そんな真っ青な顔して言われてもな」

リリィ「しばらくは安静にしてなければダメですわ！」

レオン「こうしている間にもマモノは活性化しているんだ、休んでいる訳にはいかない」

そう言って立ち上がろうとするが、ジークに両肩を押さえられ椅子に体を固定される。

ジーク「大人しくしろおい」

レオン「ぬう・・・」

リリィ「わたくしが責任を持って介抱して差し上げます」

レオン「そんなに重症じゃないんだが」

そんな事をしていると、家の外から子供が駄々をこねている様な声が聞こえてくる。

少年「放せよー」

ミラ「ええからはよこいや」

少年「やーだー」

そんな声が家の玄関前に到達するやいなや、ドアが蹴り破られてミラと引きずられた少年が入ってくる。

ミラ「タタルを連れてきたで」

目の前に引っ張り出されたタタルと呼ばれる少年は狼の様な風貌をしており、いかにも悪ガキといった顔をしていた。

ミラ「タタル、レオンにあやまりや」

タタル「やだね」

ミラ「ほな、いっぺん地獄みせたるか」

タタルの生意気な態度にまたもお怒りになられたミラ姐さん。頭めがけて怒りの鉄鎚が下されると、部屋中に”ゴツツ”という鈍い音が響き渡りその痛さを物語る。

タタル「・・・」

レオン「続いて問う、剣は高い所に置いてあるのか？」

タタル「はい」

レオン「ならば低い所か？」

タタル「いいえ」

レオン「そうか、低い所だな」

タタル「さっきからなんなんだよ！」

レオン「誰が無駄口を叩いて良いと言った？」

タタル「うう・・・」

レオン「質問を続けるぞ、剣は収納してあるのか？」

タタル「・・・いいえ」

レオン「狭い所にあるな？」

タタル「はい」

レオン「では最後の質問だ。剣は寝室にあるな？」

タタル「はい・・・」

レオン「ご苦労だった」

ミラ「今のでわかったんか？」

レオン「タタルの家の寝室を調べてきてくれ。特にベッドの下のような狭い場所を入念にな」

ミラ「まかせとき」

剣の在処を伝えるとミラはタタルの家へと向かい、仲間達はしょんぼりとしたタタルを尻目にヒソヒソ話を始める。

ジーク「ヒソヒソ・・・（おいレオン、なにしたんだよ？）」

レオン「ヒソヒソ・・・（心の鍵の能力を使ったまでだ）」

ジーク「ヒソヒソ・・・（どう言う事だ？）」

レオン「ヒソヒソ・・・（質問に対して心の扉が表れるかどうかで

真偽を確認していた」

ジーク「ヒソヒソ・・・（なーるほど）」

マリ「ヒソヒソ・・・（レオンこわかったよー）」

レオン「ヒソヒソ・・・（すまないな、あれは演技だ）」

リリィ「ヒソヒソ・・・（随分とお上手でしたわね）」

レオン「ヒソヒソ・・・（他国との外交の際にナメられてしまうとマズいのでな、ひっそりと練習していたんだ）」

そんな会話をして時間を潰していると、家宅捜査からミラが戻り、その手にはしっかりと心の剣が握り締められていた。

ミラ「あつたでー」

レオン「助かった、ありがとう」

タタル「なんでバレたんだよー！」

レオン「良い事を教えてやろう、俺には嘘を見抜く力がある」

タタル「そんなのズルいぞ」

ジーク「隠れてナイフ投げてきた奴よりはマシだがな」

タタル「ぐう・・・」

リリィ「その辺にしてあげないと、泣いてしまいますわよ」

レオン「フハハハ、そうだな」

タタル「くそー！もう用は無いだろ、俺は帰るぞ」

レオン「それはダメだ、ジーク取り押さえろ」

ジーク「あいよ」

逃げられ無い様に羽交い絞めにする。

タタル「放せよー」

レオン「そう慌てるな話を聞け」

タタル「なんだよ」

レオン「お前の心にはマモノが巣食っている」

タタル「はあ？うそつけ」

レオン「マモノを放っておけば、直にお前は死ぬぞ」

タタル「ええ！？ど、どうしよう・・・」

この時点で既に心の扉は表れていた・・・が、面白いのもうちよ
つとからかう事にするレオン。

レオン「一つだけ救う方法があるんだが・・・、知りたいか？」

タタル「知りたい！」

レオン「フハハハ、教えてやろう。俺に心を開け」

タタル「どういう事だよ」

レオン「説明すると長くなる。良いから信用しろ」

ミラ「はよせんと、ほんまに死んでしまおうで？」

タタル「わ、わかったよ」

十分楽しんだ所で扉に鍵を差し込むと、辺りは光に包まれ精神世界
へと侵入する。

―精神世界―

心の扉を抜けた先には辺り一面が焼け野原となり、獣人と人間の死
体が転がる戦場を彷彿とさせる光景が広がっていた。

ジーク「なんつう場所だよ」

リリィ「惨いですわね・・・」

ミラ「これがタタルの心の中なんか」

レオン「マリン、あまり見るなよ」

マリン「うん・・・」

ジーク「ここにいるても気分が悪くなるだけだ、さっさとマモノをぶちのめしに行こうぜ！」

一行がマモノを探して歩いていると、遠くから男達の叫ぶような声が聞こえてくる。

??? 「やめてくれえー！」

??? 「うわあああー！」

ジーク「ん？なんか声がするぞ？」

レオン「俺達以外にも人間がいるのか？」

リリィ「行ってみましょう！」

声のする方向に向かってみると、先程の声の主と思われる二人の兵士が男女の獣人に命乞いをしていた。

兵士A「おたすけ」

男獣人「グルルウウウー！」

女獣人「ウホッウホッ！」

男獣人は皮の防具を身に纏った、いわゆる戦士風の姿をした狼男で、武器は持っていない。

女獣人の方は布の服を着たゴリラのような姿をしていて、ヘソから黒い紐の様なモノが伸びており、その先には幅50cm程の黒い球が繋がっていた。

兵士B「頼む！助けてくれ！」

??? 「獣人が同じ事を言っても人間は助けてくれなかったよね？」

兵士達は誰かと話をしている様で、相手の声は感じからして少年だと思われるが、そんな子供の姿は何処にも見当たらなかった。

兵士A「し、仕方なかったんだ！」

???「それなら君達をヤルのも仕方ないよね!? ママ、やっちゃって！」

その声を聞いたママ（女獣人）が黒い紐を掴むと、黒球をブンブンと振り回して兵士めがけて投げつける。

しかし、あまりにも予備動作が長かった所為で、兵士の前には既に盾を構えたジークがおり、振り下ろされた黒球を軽く受け流す。

ジーク「おまえら! さっさと逃げな！」

兵士B「恩に着るよ!」

兵士達が急いでその場を離れると、仲間達がジークのもとへと駆け寄る。

レオン「よくやったぞジーク」

ジーク「あんなメスゴリラ相手じゃないぜ」

???「なんで、邪魔するんだよ!?!」

怒ったような口調でそう問いかけると、ジーク節が炸裂する。

ジーク「知りたいか? ならばお前の名を名乗れえーい!」

???「いいだろう、教えてやるよ。ぼくは【憎悪】だ」

ジーク「ただのわがまま小僧じゃねーか」

憎悪「うるさいな! パパ、そいつをやって!」

その言葉を聞いた、パパ（男獣人）がジークに狙いを定め襲い掛か

る。

パパ「グルルウアアア！」

ジーク「レオンは女の方頼む！」

レオン「任せろ。リリイはマリンを護り、マリンは敵の弱点を探れ！」

マリン&リリイ「はい！」

ミラ「うちはどないしよう」

ジーク「ミラはレオンの援護を頼む！」

ミラ「よっしゃ、まかせとき！」

レオン「各自行動開始だ！」

こうして3チームに分かれての戦いが始まり、まずは弱点を探す為に唄い始めるマリン。

リリイ「安心して歌に集中してね」

マリン「うん！それじゃあ唄うね。ラララ♪」

ママの元に向かった二人は前後を挟むように陣形を組む。

ミラ「うちが敵を翻弄したるさかい、レオンは攻撃に徹しや！」

レオン「任せたぞ」

ママは黒球を振り回して応戦するが、素早い猫獣人のミラには当たらず、隙が出来てはレオンに切られ、かといって今度はレオンを狙ってみれば、ミラに切られるという、負のスパイラルにハマっていた。

レオン「随分と弱いな」

憎悪「くそう！なめやがってー！パパはなにやってるの！？」

その頃パパはジークとのタイマンの最中であり、殴る蹴るの体術を駆使して攻撃するが、大盾を使って防御に徹するジークの前では完全に無力であった。

こうして2チームがそれぞれの相手に時間を稼いでいると、ようやくマリンが唄い終える。

マリン「ラララ～・・・。レオン！弱点は黒い球の中にあるよー」

レオン「ミラ、聞いての通りだ。黒球を叩く！」

ミラ「了解や」

弱点を特定した二人が黒球に集中的に攻撃を加えてみるも、球は圧倒的に硬くて削る事すらできず、むしろ攻撃を避けながら戦闘している二人の体力の方が削られていた。

レオン「はあはあ・・・、壊れないな・・・」

ミラ「そろそろキツツイで・・・」

憎悪「そんな攻撃で壊れる訳ないだろ。それにしてもあの人魚邪魔だな・・・。ふたりとも、先にあいつからやって！」

マリンの歌を脅威と感じて目標を変更するが、パパはジークのいやらしい戦法にハマり、ママも二人相手に身動きが取れない状態だった。

憎悪「ふたりとも役に立たないな！もういいよ！僕がやる」

そう言い放つと”オギャー”と大声で泣き始め、一同はその声のデカさに思わず耳を塞ぐ。

ジーク「うるせええー！！！！」

ミラ「頭が割れそうや！」

憎悪「ふたりともチャンスだよ！」

一同に隙ができたので獣人夫婦がすぐさまマリンめがけて走り出す・
・が、ママは足が遅かったのでアツサリと捕まってしまった。

ジーク「リリィー！狼がそっち行っただぞ！」

その声はリリィの耳には届かなかったが、向かってくる敵の姿で状況を把握する事ができ、ムチを構えて間合いに入ってきた所を強く打つ。

リリィ「やあっ！！」

限界まで撓わせたムチは恐ろしく速く、避けるのは難しいと踏んだ
パパは手で掴もうと試みる。

その様子を見たリリィが”ニヤリ”と笑うと、ムチが蛇の様に体に
巻きつき、キツく締め上げる。

パパ「グルルウ！？」

驚いたパパは急いでムチを振り解こうとするが、動けば動くほどキ
ツく締め付けられてしまい、その数分後には完全に束縛されていた。

マリン「リリィー、すごい！」

憎悪「くそう！なんだよそのムチ！」

リリィ「このムチは【八蛇鞭】と言って、クインシー家に伝わる家
宝ですよ」

憎悪「おまえらずるいぞ！ママ、早く倒してよ！」

その頃、ママと戦っていたレオン達は相変わらず黒球を破壊できずに苦戦していた。

レオン「この泣き声さえ無ければ剣技を使えるのだが・・・」

剣技は精神を集中させる事が前提となっていた為、この騒音の中では気が散って使えないのである。

ミラ「ほんなら、うちが何とかしてみよか」

レオン「何か策があるのか？」

ミラ「策っちゅう程でもないけどな、試しにやってみるわ。しばらく時間稼いでおいてな」

そう言って少し離れた場所に向かうミラ、それと入れ替わりにジークがやってくる。

ジーク「レオン、狼男の方は無力化したぜ」

レオン「良くやったぞ。後はこのメスゴリラだけだ」

言われた通りにママの気を引き時間を稼ぎ始める二人。

その頃ミラは何かの舞を舞い続け、ひたすらに同じ場所を行ったり来たりしていると、いつの間にか地面には巨大な魔法陣の様なモノが描かれていた。

ミラ「できたでー！でてこいやあー！」

その言葉と同時に魔法陣からは光が溢れ、中からは黒いスーツにメガネ、右手にはカバンを持ち、七三分けをビシッと決めた大人しそうなサラリーマンが現れた。

サラリーマン「どうもー、お呼びでしょうか？」

ミラ「ようきてくれたな。所で自分だれや？」

サラリーマン「これは申し送れました。私、こういうモノです」

一枚の名刺差し出すと、そこには【音無 静男】と名前が書かれていた。

ミラ「自分、けったいな名前やね」

音無「よく言われます」

ミラ「まあええわ。いきなりで悪いんやけどな、あの騒音消してくれる？」

音無「お任せ下さい」

そう言ってスーツのポケットから機械を取り出し操作すると、誰かと会話をし始める。

音無「あー、もしもし。私だ、例の装置作動して、うん、そう、今すぐにね。はい、またね」

ミラ「何しとんの？」

音無「会社の方に連絡しましたので、そろそろ泣き声が止みますよ」

その言葉通りに憎悪の泣き声はすぐに止んだが、同時にある違和感を覚える。

ミラ「（なんやこれ、音が聞こえへんやん！って声もでてへんやん！！）」

音無「（やべ、やりすぎちゃった）」

やりすぎちゃった音無さんは足早に魔法陣の中へと消えていく。

ミラ「(までやコラ!説明せんかい!!)」

ジーク「(うおー!声がでねえー!?)」

憎悪「(なんだよこれー!?)」

ママ「(\$%&am p;\$&am p;\$&am p;\$!?!?)」

レオン「(メスゴリラが混乱しているぞ・・・、これはチャンスかもしれない)」

憎悪の声が聞こえなくなった事でママが挙動不審になり、その隙に集気を使用して極限まで力を溜める。

しばらくすると剣は直視できない程の輝きを放ち、その事を確認したレオンは黒球めがけて走っていく。

憎悪「(うわああああ!こっちにくるなー!)」

そんな想いとは裏腹に容赦なく叩きつけられた一撃は、憎悪を護っていた黒い球を真つ二つにすると同時に中のコアまでも粉碎した。すると、憎悪と獣人夫婦は黒いモノとなって剣に吸い込まれていき、精神世界は崩れ始める。

レオン「早く逃げるぞ!」

ジーク「おっ?喋れるようになったな」

いつの間にか音が戻っていたが、今更どうでも良かったので、さっさと心の扉から現実世界へと戻るのであった。

ーニャンプー 村長の家ー

タタル「な、なんだよ今の光!？」

レオン「今の光でマモノは滅びた。気分が良いだろう？」

タタル「言われてみればそんな気も」

ミラ「よかったなあ、もう死ぬ事はないで」

タタル「やったー!」

嘘にすっかり騙されてしまったタタルであったが、本人はとても嬉しそうな顔をしていたので真実は話さないのでおく事にした。

ジーク「てか声が出なくなっただけ、あれはなんだったんだ？」

ミラ「すまん、音無のアホが失敗しよったんや」

ジーク「音無? 誰だそりゃ？」

ミラ「あー、自分らは見とらんかったな。うちが舞で呼び出したスケットや」

レオン「召還という奴か、面白いな」

ミラ「けどな、何が出てくるかはうちにもわからんねん」

ジーク「それでも良いじゃんか、俺も必殺技欲しいよ」

しばらく会話していると、”コンコン”と何か硬いモノを叩く様な音が聞こえてくる。

一同が気になって辺りを見回してみると、玄関前に一人の青年が立っていた。

青年「どうも。扉が無かったので何処をノックすればいいか迷いましたよ」

困惑した表情でそう話す青年。

外見の方というと、身長は170cm強、色黒で帽子を被り、背中に大きなリュックを背負った、いわゆる旅人の様な格好をしている。

村長「おぬしは誰だ？」

旅人「僕は【ジム】世界中を旅している最中です」

村長「それはいいとして、どうやって村に入った？」

ジム「猫っぽい人に魚をあげたら通してくれましたよ」

村長「そ、そうなのか。まあよい、座りなさい」

ジム「お邪魔します」

そう言っただけで家の中に足を踏み入れると、先に座っていたレオンに話しかける。

ジム「隣いいかな？」

レオン「どうぞ」

青年は”どっこいしょ”と言いながら席に座ると、村に訪ねてきた理由を語り始める。

ジム「僕がこの村に来た理由は一つ・・・、道に迷いました」

村長「何処に向かおうとしていたんじゃ？」

ジム「確か・・・、【ミュジカ】って言ったかな？面白い事件が起きているみたいなんですよ」

村長「ほうほう、それならこの村とは正反対ですぞ」

ジム「あちゃゝ」

事件という言葉聞いたレオンは、すぐさまジムに事情を尋ねてる。

レオン「よろしければ、その事件について詳しく教えて頂けませんか？」

ジム「ん？事件と言うのはだね【ゲレン・デスキー】という音楽家がスランプになっているらしいんだ」

レオン「それは最近の事ですか？」

ジム「ああ、その通りだ。噂じゃ悪霊にとり憑かれたって話だよ」
レオン「なるほど……。ありがとうございます」

ミラ「どう聞いてもマモノの仕業やんな？」

レオン「間違いないだろうな」

ジーク「よし、次の目的地が決まったな！」

レオン「確か村の正反対と言っていたか……。行くか」

ミュジカに出発しようと席を立った瞬間、レオンがバランスを崩してその場に倒れる。

ガシャーン！

ジーク「おい！どうしたんだよ！？

レオン「はあ……。はあ……」

リリィ「すごい熱ですわ！」

ミラ「うちが先生呼んでくるわ！」

タタル「あつ、やべ」

何か重大な事を思い出した様子のタタル、仲間達は嫌な予感がしたが尋ねてみた。

マリィ「どうしたの？」

タタル「ナイフに毒塗ってあったんだ」

ミラ「はあ！？なんでもっと早くいわんのや！」

タタル「いやー、忘れてて」

ジーク「てめええええー！！！」

その言葉に思わずカツとなり、顔面にストレートを決めると、
”メキメキ”と音を立てながら体ごと吹き飛ばされ、更には勢い余

って壁を突き破る。

ジーク「ふざけやがって・・・」

その怒りは憤怒すら上回る勢いで、壊れた壁から外に出ると、トドメを刺そうとゆっくり近寄る・・・。

タタル「ご、ごめんなさい！」

ジークが放つ殺気を本能で感じたのか頭を下げて素直に謝るが、そんな事で怒りが収まる筈も無く、じわじわと距離を詰めていく・・・。

ジーク「・・・じゃあな」

タタルめがけて突き刺される槍。

もうダメかと諦めて目を瞑るタタル。

タタル「……」

しかし、しばらくたってても槍が体に刺さる様子は無く、不思議に思ったタタルが恐る恐る目を開けてみると、

目先数cmの所で槍が止まり、その先にはジークの喉元にナイフを当てるジムの姿があった。

ジーク「なんの真似だ？」

ジム「その辺にしといてやんなよ」

ジーク「先に仕掛けてきたのは小僧だ」

ジム「この子の命を奪っても彼は元気にならないよ」

ジーク「ケジメはつけなきゃなんないだろうが？」

ジム「やれやれ・・・、仕方ないか・・・」

一触即発の二人、毒に苦しむレオン、壁を壊されて涙目の村長。
この続きは次回のお話で。

第八話 完

良い嘘と悪い嘘（後書き）

少しずつですが、地の文等も研究しています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1780ba/>

心の在処

2012年1月13日01時50分発行